

# 教職大学院 Newsletter

# No. 58

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2013.12.24

## 教職大学院のさまざまな可能性と今後の課題

福井大学教職大学院 教授 森 透

先日の12月8日(日)に東京で平成25年度日本教職大学院協会シンポジウムが「教職大学院の更なる発展・拡充と質の向上」をテーマとして開催された。基調講演は布村幸彦文科省高等教育局長の「教員養成の改革と充実等について」、続くパネルディスカッションでは、「教職大学院の更なる発展・拡充と質の向上」と題して、村山紀昭氏(協力者会議主査・前北海道教育大学長)、高乗秀明氏(京都教育大学大学院連合教職実践研究科長)、長野正氏(玉川大学大学院教育学研究科長)、岸田正幸氏(和歌山県教育委員会学校教育局長)という4人のパネラーが登壇し、コーディネーターを加治佐哲也氏(日本教職大学院協会会長・兵庫教育大学長)が務められた。そこでは様々な視点から教職大学院の成果と今後の課題が提起された。パネルディスカッションのあとは協会の授業改善・FD検討委員会座長の松木健一氏(福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻長)が①学校実習に関するモデル・カリキュラム作りについて、②教職大学院の担当教員の資格基準に関する調査について、を提案された。

今回のシンポジウムの背景として10月15日に報告書「大学院段階の教員養成の改革と充実等について」(教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議・主査村山紀昭氏)が公表された。ここでは、「学校教育を取り巻く現状と教員養成における課題」「大学院段階の教員養成の改革と充実」「教職課程に関する情報の公表」「教職課程のグローバル化対応」の4本柱について言及されており、特に「教員養成の高度化の必要性」が強調され、平成20年度以降に設置された教職大学院については「学校における実習を通じて学校現場の課題を解決する試みを教育課程に取り入れることで、理論と実践を往還させた省察力による新たな学びのデザインや複雑な学校課題に対応する探究的な実践的指導力の育成を可能とし、学部や教員養成系修士課程でなし得なかった学修成果を生み出している」と高い評価がなされている。一方、今後の教職大学院の課題とし

ては、「教科の取扱いや実習の在り方などを含めた教育課程の更なる充実、教職大学院で必要となる学校経営分野などの研究者養成、教職大学院設置数増加のための方策、教職大学院進学のためのインセンティブの付与などが残されている」との指摘がなされている。

昨年の中教審答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(平成24年8月28日)でも教職大学院の課題が次のように具体的に指摘されている。つまり、第1に「新たな学びに対応した教科指導力や教科専門の高度化を達成しうるカリキュラムの在り方、学校における実習を勤務に埋没させず、理論と実践の往還により理論に裏付けられた新たな教育実践を生み出していく方法の開発など、更に追求すべき課題も残されている」こと、第2に「共通に開設すべき授業科目の5領域について見直しを図り、学校現場での実践に資する教科教育を行うものや、グローバル化対応、特別支援教育、ICT活用、学校経営など特定分野の養成に特化するものも含め、教職大学院の制度に取り込んでいけるよう制度改正を行うべき」こと、第3に「現在、生徒指導に関する実践的指導力を育成するための

### 内容

- 教職大学院のさまざまな可能性と今後の課題 (1)
- 合同カンファレンスに参加して (2)
- 丸岡南中学校 自主研究発表会に参加して (4)
- 中藤小学校 公開研究会に参加して (6)
- 安居中学校 公開研究発表会に参加して (7)
- 高椋小学校 公開授業研究会に参加して (8)
- スクールリーダーフォーラムに参加して (9)
- 東京ラウンドテーブルに参加して (12)
- 愛育養護学校 (16)
- 拠点校・連携校だより (19)
- ラウンドテーブルの案内 (24)
- 書評 (28)

コース等を設けている教職大学院もあるが、いじめ・暴力行為・不登校等生徒指導上の諸課題は深刻な状況にあるため、さらに、事例やノウハウの集積を重点的にを行い、生徒指導に関する教育研究の拠点となるよう更なる充実が望まれる」こと、第4に「教科に関する科目担当教員については、理論的アプローチにより、学生に対し実際の教育活動に直接生かすことができる指導を行うことにより、教職大学院における担当教員となることが期待される」こと、である。

以上の課題を考えると、福井大学だけではなく教職大学院を設置している大学はいずれも実践―省察―再構成の努力を惜しまずに改革を続けていくことが不可欠で

あろう。その場合、お互いの長所や課題を率直に交流し協働しながら相互に高め合う関係性を構築していくことが求められる。現在大学は競争的な環境におかれているゆえに、特に教員養成・教師教育に関しては教職大学院は当然として、既設の教員養成の大学院スタッフともお互いの接点と可能性を探りながら、日本の教師教育全体の発展のために尽力することが必要ではないかと考えている。

(参考文献：拙稿「福井大学における教育実践研究と教師教育改革―1980年代以降の改革史と教職大学院の創設―」『教育学研究』第80巻第4号、2013年12月)

## November 合同カンファレンスに参加して

### スクールリーダー養成コース1年／高浜町立高浜中学校

#### 清常 徹

11月の合同カンファレンスのテーマは「他校の研究から学ぶ」であった。

このテーマによる合同カンファレンスのよさを3つ感じた。

1つ目は、他校の研究会からじっくりと学ぶ機会を与えてくれたことである。

スクールリーダー養成コースで学ぶ我々は、半日4コマ分(2日分)の他校研究会参加が義務づけられており、そこで学んだことを11月の合同カンファレンスで報告することになっている。

多忙極まりない学校現場を空けて、他校の研究会に参加するには一大決心がいる。学級や授業、部活動の補填を誰かに依頼しなければならず、他の先生に負担をかけてしまうことになるからである。これまで、他校の研究会へ参加したいと思っていても二の足を踏むことが多かった。

今回、私は、嶺北にある丸岡南中学校の自主研究発表会に参加させていただいた。ため息が出るほど質の高い教育実践を目の当たりにすることができた。普通なら参加することがないであろう嶺北の研究会に参加しようと、嶺南に住む私の背中を押してくれたのは、教職大学院のカリキュラムだった。

2つ目は、数多くの学校の優れた研究実践を一度に知ることができた点である。

合同カンファレンスのクロスセッションでは、同じグループになったメンバーが、研究会に参加して学んだことを互いに報告し合った。これまでに参加した研究会の中から、これぞという学校の、これぞという実践について2時間近く語り合った。中には、遠く長野県の伊那小学校や富山県の堀

川小学校の実践を報告してくれたメンバーもいた。一つのテーブルを囲み、「他校の研究から学ぶ」というテーマで語り合うことで、日本の各地で多くの優れた実践が展開されていることを実感できたし、学校による違いや共通点も感じながら聞くことができた。

私は、小浜中学校と丸岡南中学校の報告をさせていただいた。落ち着いた学習環境の中、生徒を中心とした実践が展開されていることが共通点だった。ただ、その手法は違っていた。小浜中学校は授業づくりと仲間づくりを両輪とし、行事を中心とした仲間づくりが学習集団の質を高め、その高まりがさらに温かい生徒同士のつながりや個の成長に結びついていくというものであった。丸岡南中学校は、スクエア制という縦割り集団の取り組みを充実させていることと、各教科の教室に生徒が移動して授業を受けるという教科センター方式をとることで、これまでの学校のスタイルとは異次元の運営をし、質の高い学校づくりを展開していた。

子どもを成長させるという、めざす頂上は同じでも、そこに向かう道筋は幾通りもあるのだということを、再認識した。それは、今回、たくさんの優れた研究実践を一度にテーブルの上に置いてみることで見えてきたことであった。

3つ目は、研究会での自分の学びの捉え直しができたことである。

クロスセッションで同じグループになった高浜町和田小学校の山本先生は、私と同じく丸岡南中学校の自主研究発表会に参加された。私の前が山本先生の報告だったが、それを聞いて驚いた。私の報告しようとしていた内容とは、全く別の視点からの報告だったからだ。私は、

研究主題である「学び合う学校文化の創造」という視点で、グループ学習で交流ができていくか、その交流は学び合いになっているかということについての報告を考えていた。きっと山本先生も同じ内容の報告であろうし、自分の番が来たら「山本先生もおっしゃいましたが…」という前置きが必要だと思っていた。杞憂だった。山本先生は、もっと大局的な視野で研究発表会に臨んでおられた。丸岡南中学校は、先に述べたように教科センター方式やスクエア制など、新たな視点で学校づくりを進めている。創立8年目を迎えた現在でも形骸化は見られない、というよりも進化し続けているようだ。山本先生は、丸岡南中学校の学校運営の魅力を分析し、我々に教

えてくれた。学校運営という視点に欠けていた私は、そういう見方もあるのかと驚いたのである。同じ研究会に参加しても、通るフィルターによって報告内容が大きく違ってくるという体験をした。

勤務校を空け、他校の授業を参観したり、研究会に参加したりした後、そこで学んだことを私たちはどうしているだろうか。しっかりと振り返りをしているだろうか。学んだことを報告したり、交流したりしているだろうか。報告や交流が、また新たな気づきを生む。そして他校からの学びを確かなものにする。研究会参加後の振り返りや交流が、非常に大きな研修意義を持つことに気づかせてくれた合同カンファレンスであった。

## 教職専門性開発コース2年／福井大学教育地域科学部附属中学校

### 筏井 紀代美

今月のテーマは「他校の研究から学ぶ意義」ということで、武生東高等学校の野坂智裕先生（以下、「野坂先生」とします）のオリエンテーションでは、他校との交流を通して学んだことが語られました。生徒内の仲間関係についてのお話だけではなく、（私も一応国語科を専攻しているので）教科についての思いにも共感できるところがかなりあったため、私はオリエンテーション中、終始頷き続けてしまいました。

その後に行われたグループ討議①では、野坂先生のオリエンテーションを踏まえた上で、感想をひとりひとり順番に言っていき、そこから共通の話題に入ろう、というものでした。校種も教科も学校内での立ち位置も異なる院生たちが同じ場に集まり、語り合っていることそのものこそ、「他校の研究から学ぶ」ということだと思います。特に、教職大学院の拠点校は研究が盛んになっているところが多く、多忙な中でも、研究に日頃から精力的に取り組んでおられるスクールリーダーの先生方、また、そんな中で学ぶことのできるストレートマスターの院生たちとともに語り合うことができます。今回のテーマは、この時期に多い「他校の研究集会に行く意義」ということだけではなく、教職大学院の学びのしくみそのものの中に組み込まれている、「異なる専門性を持つ他者と学ぶ意義」ということの意義を捉え直すような、包括的なテーマだと思いました。こうした私の漠然とした感覚は、野坂先生のオリエンテーションのまとめ、「校種も立場も違う先生方の話に共通するものを見つける」というお言葉によって、確かなものとなることができました。

グループ①の中で、私は日頃、「聴くこと」で抱いている疑問を先生方にお伝えしました。同じ学校の先生方同士で子どもについて相談する場合、大抵は「あの子か」と顔を思い浮かべることができません。しかし、この教職大学院のように他校の院生同士で語る場合は大抵、ほとんど知らない子についての語りを聴くことになりま

す。自分の目の前にいない子どもたちを、自分のほとんどない知識や経験で理解しようとするには当然限界があります。それでも、会ったことのない子どもの話でも、何となく子どもの様子や感情を想像することができるのが、私は不思議でなりません。先生方がおっしゃるには、過去の経験などが入っているから、それに基づいて判断しているのかもしれない、ということでした。そこには「思い込み」や「勘違い」もあります。しかし、人間は、会ったことがなくても子どもの思いを（どれほど正確かは別としても）ある程度想像でき、「そうだよね」「そうかもね」と納得できるからこそ、教職大学院のような「聴き合い、語り合う」学びの場が成立するのだと思います。自分の想像力（思い描く力）、コミュニケーション能力（ともに良い方向を探る力）を高めていきたいと改めて考えさせられた時間でした。

午後は教科別に分かれたグループ（グループ②）で「自分自身の実践の挑戦を語る」ということで話し合いが行われました。それぞれの先生方の豊富な実践経験を基にしたお話はどれも非常に学びになりました。その中で特に印象深かったのは言語活動についてです。午前中のオリエンテーションにもありましたが、学校での学習指導は評価がなくては成り立たないものであるにも関わらず、評価と指導がかけ離れていたり、「学校で学んでいること」と「受験の時に役に立つこと」と「社会に出てから役に立つこと」がかけ離れていたりする現状もあります。特に、国語科の言語活動の評価を一体どういう観点から行うのかということについては難しいということ、目的に応じて効果的などところで言語活動を取り入れるのが良いのではないかというお話になりました。言語活動についてはこれから具体的な実践を通して考えていかなければいけないことなのだ改めて考えました。

M2である私にとって、合同カンファレンスらしい合同カンファレンスはこの11月で最後です。スクール

リーダー・ストレートマスターの両コースの院生全員とともに学ぶ機会は、あとは冬期集中と長期実践報告会、そして修了式くらいしかありません。そのため、この日の合同カンファレンスに向かう時には、指先が冷えるような11月の空気を感じながら、少し物寂しいような思いも持ちながら歩いていました。

去年の私は今よりも「聴き下手」であり、語られている内容についても今よりも理解度が低く、先生方のお話を「聴

く」ための状態になっていなかったことが多く、もったいなかったと心残りに感じることもあります。しかし、見方を変えれば、教職大学院では「聴く」ことの重みを感じさせられるような経験を積ませて頂いたということだと思います。そして今回は大変充実した合同カンファレンスという気持ちを持って終えることができたことは、非常に嬉しかったです。ありがとうございました。

## 教職専門性開発コース1年／福井市至民中学校

### 坂下 元

今回の合同カンファレンスは「他校の研究から学ぶ」というテーマでした。午前のセッションでは佐賀県からいらした北原先生、敦賀工業高等学校に長年勤務されている谷先生、院生の堀江さんと同じテーブルでこのテーマについてセッションが進みました。しかし、正直に言うと今回のテーマで何を喋れば良いのか分からずにいました。しかし、同じテーブルの先生方の実践をお聞きしているうちに自分がインターンをさせていただいている至民中学校での取り組みの良さを改めて実感することができました。校種や年齢が違う先生方が集まりお互いの実践を語り合う中で、自分の実践が意味付けられていく体験ができ、自分の実践をより多くの視点で省察するきっかけができたのではないかと考えています。これからは、至民中学校にいるからこそできることを意識しながら実践を進めること、他校の実践が公開されている場に行ける限り足を運び、他校の実践の良さを自らの実践に取り込むことを大切にしていきたいと考えています。

午後は、専門教科毎に分かれ自身の実践の展望を語り合う時間が設けられました。私のグループではストレートの院生がほとんどで「課題をどのように子供に近づけるのか」ということについて話し合いが進みました。私自身10月に単元を通じた授業実践をさせていただいた

のですが、教科書で扱われている題材が子供にとって馴染みの薄いもので教科書に込められているメッセージを元に読みを深めていくという授業ができず、ただただ文構造を押さえるという読みの本質から離れた授業をしてしまっていたので、今回の議題に自分の実践を深く重ね合わせながら話すことができました。同じテーブルの先生方から「子供に近い課題を教師が用意することもひとつだけれど、子供に遠い題材と子供の生活を結びつけることも必要ですね」という助言を頂き、今後の自分の実践にとって非常に重要な示唆をいただけたと感じています。

毎回、合同カンファレンスに参加させていただくと感じるのですが、いかに自分が狭い視点でしか自己の実践を振り返ることができていないかを痛感しました。しかしカンファレンスの回数を重ねるごとに他の実践を聞くことで新たな示唆をいただき、自己の実践が意味付けられていくことを感じています。今回の「他校の研究から学ぶ」というテーマではスクールリーダーの先生方が他校の研究から学ぶプロセスをお聞ききする中で自分の属している組織の外からの学び方を学ばせていただいたのではないかと考えています。

## 公開研究会報告

# 丸岡南中学校 自主研究発表会に参加して

スクールリーダー養成コース2年／高浜町立和田小学校

### 山本 毅

この度、福井大学教職大学院の拠点校の一つである丸岡南中学校の「自主研究発表会」に参加させていただいた。「学び合う学校文化の創造」を研究主題に据えた丸岡

南中学校の大きな特徴は、「教科センター方式の導入」・「メディアセンターの活用」・「スクエア制による縦割り集団活動」の三つである。

まず「教科センター方式」であるが、至民中学校と同じく各教科ごとに専用教室が設けられている。各学級の教室に教科担当の教師が入れ替わり立ち替わり出入りするのではなく、授業ごとに生徒たちが学習用具を持って各専用教室に移動していく方式である。その専用教室は各教科ごとのエリアに設けられており、そのエリア自体が各教科の特性を醸し出す学びの空間となっている。そこには教科学習に関連する資料や情報が整備されており、いつでも授業で活用できるようになっていた。また、教科担当の教師が常駐できる場も設けられ、生徒が気軽に質問や相談をしに行けるようになっていた。それが「メディアセンター」として機能しているのである。また、教室を含む教科エリアには、生徒が学習したことを生かして表現した作品などが掲示されており、生徒同士の学びの交流の場となっている。このメディアセンターの運営は、教科部会における協働の営みがあってこそ成り立つものであるが、それと同時に、異教科の担当教員同士の学び合いも生み出している。教科ごとに特色あるエリアづくりが行われることは、教科間でその良さを認め合い、高め合うことにもつながっているのであろう。

丸岡南中学校の斬新な校舎建築とそれを生かした「教科センター方式の導入」と「メディアセンターの活用」から、改めてそのねらいや効果を知ることができた。それは、生徒の主体性を重視していること、教科の学習内容に対する関心・意欲を高めることにつながっていること、そして各教科ごとに3年間の見通しもって学べるようにしていることの三つである。この学びの空間づくりが生徒の高い学習成果を生み出しているのである。

一方、学校全体の人間関係づくりとして「スクエア制」という異学年の縦割り集団が大きな意味を果たしていることも分かった。「宙・花・鳥・風・月」5つの縦割り集団を編成し、それが日常の学校生活や学校行事での活動基盤となっている。この「スクエア制」は、異学年の生徒同士の仲の良さを生み出したり、上級生のリーダー性を育んだりすることで、丸岡南中学校の良き学校文化を継承することにつながっていると説明された。おそらく同じ目標を持って活動に取り組む中で、生徒たちの中に学年の壁を越えて協同する意識が芽生え、温かい人間関係が構築されているのだと理解した。また、個々の教員が学

級・学年という狭い担当意識をもつことなく、全教員で全校の生徒たちを見守っていきこうする生徒指導の協働体制を生み出していることも、「スクエア制」のよさであると感じた。

その教師集団の協働について、丸岡南中学校では附属中学校と同じように異教科の担当教員で構成する「教員グループ」が3部会設けられ、教科の壁を越えて協働する授業づくりに取り組まれている。グループごとに毎月1回の公開授業を行い、事後協議会において「生徒の学び」を追った記録をもとに話し合う。その成果(事後協議会の記録)をグループ間で共有することで、一人一人の教員が普段の授業に還元していく。それがまた、次の公開授業につながっていく。公開授業が単発なものに終わらず、日常の授業改善に生かされ、さらにより質の高い公開授業の提供につながっていく授業づくりの流れは、まさに持続・発展可能な教師集団の学び合いと言える。

この丸岡南中学校の研究と取り組みの成果は、参観した公開授業(第3学年:英語科)における生徒の姿に反映されていた。「主体的に学ぶ生徒の育成」・「協同学習によって学び合う生徒の育成」・「生徒同士の温かな人間関係の構築」といった全てが、英語学習に取り組む生徒の姿に見て取れた。これは、担当(担任)される先生の学習指導・生徒指導・学級経営の努力の賜であることには間違いないが、やはりそこには、教師個々の努力を支える教師集団の協働があつたのと思う。教師集団が教科・学年・学級担当の壁を越えて協働する丸岡南中学校の学校文化は、まさに「生徒指導と学習指導の一体化」した実践を生み出している。この拠点校の質の高い学校文化を、生徒の姿を通して学ぶことができたことは、自分にとってたいへん貴重なものと受け止めている。それと同時に、これまでに訪問した同じ拠点校の福大附属中学校・至民中学校における「教師集団の協働によって子どもの学びを支える」取り組みについて改めて深く理解することができたことも、たいへん大きな学びであったと実感している。校種は違えど、今回の訪問で得たことを生かして、本校における「つながり合い、認め合う児童の育成」のための「つながり合い、認め合う教師集団の協働」を目指していきたい。

## 教職専門性開発コース1年／福井大学教育地域科学部附属中学校

### 棟田 章裕

11月15日に丸岡南中学校の自主研究発表会が行われた。丸岡南中学校は福井県初の教科センター方式の学校としてつくられました。生徒は特定の教室で授業を受けるのではなく、教科の教室に移動して授業を受けており、休み時間には鞆を持って教室を移動する姿に驚かされました。私は初めて学校で迷子になりましたが、それぞれのメディアセンターの工夫された掲示物に目を奪わ

れました。一般的な学校では、1つの教室で様々な教科の授業を受けるため、授業が始まるまで教科の色を感じるのには難しいですが、各教科の教室近くにメディアセンターがあるため、日頃から教科の学びに触れられる環境があると感じました。また、すれ違う生徒からはさわやかな挨拶を受け、充実した学校生活を送っている姿を垣間見ることができました。



公開授業では、理科の授業を参観させていただきました。「電気の世界」という単元で、各班でブラックボックスを作り、他の班が抵抗のつなぎ方を推理するというものでした。私は実験を「楽しそう」に取り組む生徒がとても印象的でした。この「楽しそう」というのは、回路を組み替える人、測定結果を読み上げる人、それを記録し抵抗値を計算する人など、班の中で自分の役割を見つけながら実験結果を導き出していき姿や、ホワイトボードを中心に頭を突き合わせて推理したり、上手いかずに頭を抱えて悩み、測定が失敗だったのではないかと測定をやり直したりする姿です。そして試行錯誤を繰り返した末に答えが導けた瞬間、生徒から笑みが溢れていました。この過程すべてが理科を学ぶ楽しさの1つであり、また、丸岡南中学校の目指す「学び合うことができる生徒」が育まれていると感じました。

授業研究会では、8つのグループに分かれて授業を振り返りました。その際、授業者の先生と協働して授業を作られた先生がファシリテーターとして各班に入られたことで、授業の意図や生徒一人ひとりの普段の様子を結びつけて振り返ることができ、他教科の先生と生徒の学びを追うことの重要性を改めて感じることができました。

最後に、丸岡南中学校の自主研究発表会に参加させていただき、様々な学校の研究や取り組みを学ぶことの意味を考えることができました。そして研究発表会、研究集会等に参加することで視野を広げて学んでいきたいと思えます。

## 中藤小学校 公開研究会に参加して

スクールリーダー養成コース1年／福井県特別支援教育センター

船谷 友代

「一人一人が輝き、共に学び合う一さまぎまな仲間と互いに考えを高めながら」

これまで、研究主題にあまり意識を向けずに研究会に参加していたのだと、はずかしながら、最近気づいた。今回、中藤小学校の公開研究会に参加させていただき、主題やサブテーマに込められた思いや実践の、重みや深さのようなものを感じている。

中藤小学校の研究会に参加したのは、教職大学院でたびたび耳にしていた「学級を解いた学習」や「異学年合同学習」について知りたいと思ったからである。新築移転開校！の最新の施設・設備にも興味があった。

参観させていただいた授業は、3年生と4年生の国語の「異学年合同学習」であった。連続する2学年の合同学習という、よくあることのようにも思えるが、これが国語という教科の学習であることと、複数の学級のうちの1学級ずつの組み合わせであるということが、大変画期的な取り組みだと感じた。あたたかな木のぬくもりを感じる開放的なスペースで、3年生と4年生がそれぞれ別の目的を達成するために学び合う姿は、とても新鮮であった。3年生がしたためた物語文の感想文を書くために、4年生が取材をするという学習活動の中で、私が注目した司会役の4年生は、グループ内で浮上した疑問を、少しためらいながらも自ら先生に質問していた。ある3年生は、想定外の質問を受けて動揺しているようだったが、ペアの3年生と小声で相談し、ことばを選びながら返答していた。どちらの場面も、普段なら少し尻ごみしてしまう状況なのではないか、4年生の役割を意識したり、同級

生のアシストを受けたりして、いつもより少し前へ出てみようとしているのではないかと、思える姿だった。これは、イベント的な学年交流の活動だけでは生まれにくい状況なのではないかと感じた。物語文の内容を読み解いたり、感想や意見を自分の文に生かしたりという点については、国語ならではの難しさがあったように思うが、今後、回を重ねることで関係が深まり、やりとりも変化していくのではないかと期待をもった。

全体研究会では、「学年を解いた学習」「異学年合同学習」「地域と共に学ぶ学習」は具体的な手立てであって、めざしているのは、「学びの発見のある」「学びの転換のある」「学びの広がりのある」授業づくりであるという説明があった。校種を問わず、意識していかなければならない視点であると感じた。その他にも、「高学年の一部教科担任制」や「学年経営案」など、今後も経過をうかがいたい実践が目白押しであった。

授業研究会でも、グループ討議の後は全体で討議内容を共有するボードや時間が設定され、時間が足りないほどだった。

半日の公開研究会に参加させていただき、振り返ってみると、掲げられた研究主題は、子ども同士の学びの姿だけでなく、教師同士の学び合いの姿にも通じると思えた。



# 安居中学校 公開研究発表会に参加して

教職専門性開発コース1年／坂井市立丸岡南中学校

山本 泰平

今回参加させていただいた安居中学校の研究集会がインターン先の学校以外での初めての研究集会でした。安居中学校は昨年、分離開校された学校ということもあり素晴らしい学校でした。そして、その校舎以上に出会う生徒ひとり一人が「こんにちは」と大きな声で元気にあいさつをしてくれたことに感動しました。本校は福井県で3番目となる教科センター方式の学校で、私がインターンシップをさせていただいている丸岡南中学校とは少し異なった構造で風のひろばよばれる空間の周りに生活エリア（ホームベース）がありそれを取り囲むように教科エリアが設置されていました。

本校の研究主題は「社会参画型学力の育成～交流・体験を通して培う豊かな学び～」である。このテーマをもとに自己を高め、協働しながら主体的に学び、価値のあるものを創造していく力の育成を目指しています。その力が発揮されていると感じた取り組みが、生徒会の企画・立案・実践による「安居のホテル観察会」「思い出語ろう会」「夢語ろう会」です。残念ながら今年の各会には参加できなかったのだが、参加した他の院生の話を聞くと生徒たちのホテルを見つけ「こっちにいた!!」など意欲的に参加している姿や地域の人たちと交流している姿も見ることができたと感想を述べており、これは「交流・体験を通して培う学び」そのものだと考えることができました。来年度はこのような企画がある際はぜひ参加させていただこうと思います。

協働しながら主体的に学んでいく力も、参観させていただいた理科「いろいろなエネルギー」の中で見ることができました。この授業では本校に設置されている太陽光発電が1時間で発電する量をもとに、さまざまな実験を通してどれくらいの大さなのかを実際に再現・表現してみようというものでした。私が注目して見た班は「水蒸気の力で発電し、再現してみよう。」というもので火力発電実験機を用いた実験で、はじめは目的を忘れ生徒たちは発電機を回すということに力を注ぎ、回った時には「回った!!」と嬉しそうにしていました。しかし回すことが目標でないことに気づき「それで何するんだっけ?」となってしまった時、絶妙なタイミングでの先生のフォローにより別の生徒が「電力を測らなアカんのじゃ」と言って電圧計・電流計を取りに行き実験を再開する様子や隣の班が風力発電を行っていたためガスバーナーの火が不安定になると何も言わず大きな厚紙を使って風がこないようにしている姿を見ることができました。誰か一人が実験をやっているのではなく協働して実験している姿が見ることができ、最後の発表の時も各班がしっかりと取り組んでいる内容について堂々と発表することができていたことに感心させられました。

生徒を見ていると安居中学校の目指す社会参画型学力がついてきているように感じることができました。私もインターン先の丸岡南中学校の目指す生徒像実現のため微力ながら協力していきたいと感じました。

教職専門性開発コース2年／福井市中藤小学校

瀧波 裕美

私は、11月22日に行われた安居中学校の公開研究会に参加し、中学2年生の音楽の授業を参観した。本時は、これまで取り組んできた和太鼓の成果を次の授業の時間に発表する前のまとめの授業だった。授業の始めに、一度全体で演奏して、その後前の時間に演奏し、撮影したのを見て振り返り、続けてプロの方々の演奏も鑑賞して自分たちの演奏と比較していた。鑑賞中学生は、プロの演奏にくぎづけで、「わぁ～！すごい!!」などと歓声をあげていた。鑑賞後の生徒は、プロの演奏と自分たちの演奏を見比べて、もっと良くするといいたいところの意見交流をした。そして、そこで共有された意見をもとにグループごとの練習が行われた。グループ練習では、ゲストティーチャーであるプロの先生方も入り、生徒たちは先生方から指導を受けながら、和太鼓の楽しさを感じつつより質の高い和太鼓の演奏を目指して格闘

していた。グループごとの発表の際には、練習前との変化を実感してつぶやく声や仲間の良さを言い合い、互いに高め合う姿が見られた。そして、最後に全体で演奏した際には、授業の中で変化した自分たちの良さに気づき、笑顔浮かべる姿が見られ、どの生徒も満足そうにして教室を出ていく姿が見受けられた。今回この授業を参観して私は、生徒一人ひとりが“和太鼓”という「材」に向かって熱く、そして互いに高め合い、音楽にしていく楽しさを感じながら授業に参加しているように感じた。また、みんなの気持ちを一つにして演奏することの楽しさを感じながら、学習している様子が生徒の発言や行動などから伝わってきて、最後の演奏を聴いた時にはどこか胸を打たれる思いがした。私が見ていたグループでは、なかなか思うように手を動かさずに何度も練習していたり、互いに励まし合うなどして高め合っ

いる雰囲気があったりした。しかし、練習の終盤に息が合わなくなっかみ合わなくなってしまうという状況が起きた。そのため、全体での演奏の際には、そのグループの女の子二人がすごく不安そうな表情を浮かべていたが、それでも集中して打ち、みんなと合わせり最後までやり遂げると、安心したのか、笑顔を浮かべて嬉しそうにしていた。

私自身も、音楽の授業をさせていただいていたなかでの参観で、今回の授業から学ぶことがあった。それは、生徒自身が、仲間と共に合わせるからこそ味わえる合奏の良さを感じることができていた点である。音楽は一瞬

のものであるだけに、その瞬間を仲間と共に共有し、楽しんでいる姿が印象的だった。また、プロの姿を観て抱いた思いと目の前でゲストティーチャーであるプロの先生から直に指導を受けられるときどきとわくわくの入り交じった感情が生徒の意欲をより高めていたように思う。今回私も私自身の授業のなかで合奏ならではの良さである、みんなで合わせることの楽しさを子どもたちに感じ取ってほしいと考えている。みんなで音楽をし、その時間を共有するとともに、互いに達成感、充実感を味わえるような構想、授業を展開していきたいと感じた。

## 高椋小学校 公開授業研究会に参加して

福井大学教職大学院 特命助教 山口 真希

福井県特別支援教育センターのステップアップ研修を受講されている先生の勤務校である坂井市立高椋小学校で、11月8日(金)に公開授業研究会がありました。そこで5年3組の学級活動「いろいろな生き方を知ろう」というテーマの障害理解授業を参観してきました。

いま日本においてもインクルージョンの理念が具体化されつつあり、個人や社会における「障害理解」が進みつつあるようにみえます。しかしながらこの「障害理解」をどう捉え、どのように授業として取り上げるのかはとても難しいことです。文字通り、障害にかかわる知見について学習し、そのことによって子どもたちの認識、社会の変容をねらう授業なのでしょうか。小学校の低学年ではどんなことを、あるいは中学年、高学年ではそれぞれ子どもたちに何を「理解」してもらえばよいのでしょうか。

この日は5年3組の担任の先生と特別支援学級の担任の先生のティーム・ティーチングによって授業が進行しました。子どもたちはまずCDで美しい歌声による曲(『翼をください』)を聴いたあと、この歌い手がレーナ・マリアさんという出生時から両腕がなく、左脚が右脚の半分の長さしかないゴスペル歌手だと知ります。子どもたちは驚きながらも、レーナさんにきくと「できないこと」を想像し生活のなかのあらゆる諸活動を列挙していきました。ところがレーナさんには「お箸をつかってごはんを食べること」も「鉛筆で字を書くこと」も「自動車の運転」も…子どもたちが列挙した活動はすべて「できること」だと明かされます。後半はなぜレーナさんに障害(注:実際の授業では「障がい」と記述していました)がないのか、障害を取り除く工夫、とりわけ本人を取り巻く周囲の人間ができることについて考えていきました。

子どもたちは授業を通して、「障害=正常でないこと、それによりできないことがたくさんあること」から

「やりたくてもできないとき生じる壁=障害」、つまり障害が必ずしも誰かにくっついた概念ではないという風にこれまでの障害概念をリニューアルしていきました。そしてもう一步先の「障害とは誰もが持ちうること」やさらには「障害がもはや誰か個人の所有する課題ではないこと」にも気づいていけるような隠されたステップにも触れたように見えました。

それはレーナさんの使いやすさに合わせ特注して製造された自動車ができただけで、彼女は自力で運転ができるようになったという紹介の場面でした。世の中はマジョリティに合わせて製品化が進み、そのせいでマイノリティに不都合が生じているだけである、私たち人間はよく似ているけれども実は互いに「生きるかたち」が違う。この「生きるかたち」という視点に触れたことで、「障害」理解は究極のところ自我理解であることや異質な他者を認め合える集団形成といった広い意味合いを持つものという認識へつながる足場ができたように思います。

「障害」を頭で理解することと実際の人間関係の問題には乖離があるはずですが。人間関係は個々に複雑でダイナミックであるがゆえに、プライベートな関係に理屈を機械的に持ち込もうとするわけにはいきません。人が人と出会って関係を築いていく過程には、大小様々な分かりあえなさが生じるものですし、そこでの一つひとつの相互調整によって関係は深められていく、答えがないなかで傷つけあいながら手探りでつながりを確かめ合うしかないのだと思います。

「障害」というものをどうとらえるか、それを「理解」するとはどういう行為なのか、それを支える教育的なかわりとはどうあるべきなのか、このような大きな問いを投げかけられ、参観者もそれぞれに考えさせられる一日でした。



# スクールリーダーフォーラムに参加して

福井大学教職大学院 准教授 小林 真由美

11月23日、大阪教育大学においてスクールリーダーフォーラムが開催された。私にとっては6月のプレフォーラムに続いて二度目の参加となる。前日から大阪に出かけ、前回、実践発表された修了生の浜崎教頭先生と個人的にお会いし、お話を聞く機会も得た。教頭として日々奮闘しながら院に通った多忙な日々、その中で研究された教員評価システムについてのお話、専門の特別支援教育についてのお考えなど、県外の方のお話は本当に興味深い。何より、教頭としての勤務をしながら、夜間の大学院に通われ山のような研究書を読破され、立派な論文を書き上げたという、その学びを求める姿勢に深い感銘を受けた。

大阪教育大学大学院は院生の方々のほとんどが校長、教頭という管理職であるので今回のテーマ「学校づくり実践を物語る」とあるように学校づくりについての語り合いが中心となる。先日、組織マネジメント研修を受講した私にとっては、研修内容を理論や実践として改めて振り返る場となった。特に基調講演をされた鳴門教育大学教職大学院の佐古秀一教授のお話は印象的であった。

「元気の出る学校づくり」を掲げて内発的改善力を生み出すことについて語られたが、これまで自分が赴任した学校や拠点校、連携校とリンクさせながら伺っていると、まさに、今、自分の中で課題となっていることとマッチして、隣にいらっしゃった中藤小の高間先生と思わず「そのとおりだねえ」と頷きあった。組織マネジメント研修でも再三言われたことだが、これからの時代は優秀な教師の個業ではやっていけない。確かに協働の必要性は皆、感じている。難しいのはそれをどうやって一つの学校の教育力につなげていくかである。個々の優秀な教員の自分だけの興味関心で動くのではなく、学校の課題に結びつく、そして子どもの課題に結びつく「共有ビジョン」をどうやって形成していくのか。課題生成の前

に、本当の実態認識が必要であり、それが課題の必然性を生み出す。「本気でなんとかしたい」と思うことこそが実践へのエネルギーである。さらには、それに対してどう取り組んでいくのかという具体的な実践と、それでどうなったのかという実践の振り返りがまた次の課題への実態把握となる。佐古先生は「どういう取り組みをしたのか。そしてそれがどうなったのかを語り合う必要がある」と言われた。何となくイメージを抱くことができたところで、次のラウンドテーブルではこの佐古先生の院生であった香川県川島小学校の住田先生から具体的な実践例を聞くことができた。住田先生からいただいた研究集録には学校として取り組もうとした課題に対し、教員一人一人がとらえた「実態」とそれに対する「手立て」そしてその「変容」の様子が写真で示されていた。変容の姿が写真で表されると取り組みが具体的にイメージできる。その写真レポートをもとに1つの目標に向けてのそれぞれの取り組みが、若手もベテランも、世代を超えて熱く語られた様子をお聞きした。それまで病気がちだった先生も元気になり、子どもたちへの中間評価でもその項目の評価数値もアップして、まさに「元気サイクル」を実現したのである。

さらに最後の総括講演では、京都教育大学連合教職大学院の水本徳明教授が「ラウンドテーブルで語られたことを、もう一度『それって本当ですか』と問うてみることも必要。当事者のとらえた物語と、聞いている者とは食い違いがある。他人のフレームで話してもだめ」と言われた。まさに方法論に飛びつこうとしていた自分に釘を刺された気がして、心深くに刻まれた。佐古先生のお話も住田先生の実践もそのまままねしてやってみても、うまくいくはずがない。こうして得られた学びを自分の実践と結びつけながら、これからどう生かすか、これがここからの私への課題である。

スクールリーダー養成コース2年／福井市中藤小学校 高間 恵美

勤務校の公開研究会を無事終えて、心地よい疲労感と大きな達成感でいっぱいだった私は、その週末、紅葉シーズンですし詰めのサンダーバードの連結部分に、森先生・笹原先生とふらふらになりながら立っていた。勤務校の先生方からは「研究会が終わったのに大阪で報告なんて大変ですね。」とねぎらいの言葉もいただいたのだが、「学校づくり実践を物語る」というテーマは、今の私には大いに語れるものであり、それをいろいろな方に聞いていた

だけの楽しみでいっぱいだった。私は、これからやってくる大きな出会いと学びに心を躍らせながら大阪駅に降り立った。

第1部では、「学校の内発的改善力を高める組織開発」という演題で、鳴門教育大学の佐古秀一先生による基調講演があった。現在研究主任として新しい学校づくりに悪戦苦闘している私にとって、本当に身近で共感できるお話であり、本校の研究に力を貸して下さっている小

林先生と何度も顔を見合わせ、身を乗り出して聞いていた。佐古先生は聴衆の近くまで歩み寄られながら熱く語られていたのだが、私を見ながら「そこにぶんぶん首を振りながら聞いておられる先生もいますが」とおっしゃったくらいだった。

佐古先生のおっしゃる「内発的改善力」とは、実態に即して必要な教育活動を考案・実施する力のことだそう。これと逆の状態として、「無自覚的他律性」という言葉を挙げておられた。これは、常に外の情報を内に入れようとする「考えない学校」のことだそう。本校は、他の先進校の真似をするのではなく、自分たちで考案した学習スタイルを取り入れた学校づくりを行っていると自負している。佐古先生の言葉に自信を与えてもらった気がした。さらにこれからの教員像として、学び続ける教員の大切さを話された。「教える者が学び合う」学校づくりが大切であり、その学びは一人一人の勝手な学びではなく、「学校の課題を共有した学び」つまり「協働的な学び」でなければならないというお話は、私の思いを後押ししてくださるもので、本当に嬉しくなった。中藤小学校も佐古先生のおっしゃる「うずしお型の元気サイクル」で活性化できるよう、研究主任としてリードしていかなければと感じた。

第2部は、ラウンドテーブル。メンバーは、大阪府教育センターの指導主事、大阪市教育委員会の指導主事、奈良

県畿央大学の准教授、大阪府の中学校教員、沖縄県の中学校教員、そして私の6名だった。まず、私が中藤小学校での研究を40分間語らせていただき、20分間の話し合いの後、畿央大学の廣瀬先生から「学校と地域の関係を織り直すスクールマネジメントの実践」と題してお話を聞いた。廣瀬先生が小学校の校長をされていたときの地域を巻き込んだ教育活動の実践は、現在「地域と共に学ぶ学習」を学習スタイルの一つとしている本校にとって、大変参考になり、すぐにでも取り入れたいものだった。（無自覚的他律性にならないようにしなくてはいけないが。）

福井大学教職大学院のラウンドテーブルと違う点は、司会のほかに書記、タイムキーパーという役割があり、書記の先生はレポートを後日作成しなければならない関係上ほとんど発言できないということだ。報告者も前もって2ページのレポートを提出しなければならない。福井のラウンドテーブルに比べて、少し形式張っていて自由度が少ない感じがした。しかし、少人数で気楽に語り合えるよさは福井と同じだった。

この日1日で、私はたくさんの名刺をいただいた。私は、多くの福井の教員がそうであるように名刺を作っていない。改めて、私は名刺のいない狭い世界で生きているのだと反省した。今日のように多くの方と出会える場にこれからも積極的に参加していきたい。

## 福井大学教職大学院 非常勤講師 富永 良史

### 流れの中に身を置く

悪い予感がする寒い朝だった。20分近く遅れて着いた電車はすし詰め。入口ドアにへばりついて立っているしかなかった。同じ電車に乗っているはずの森先生にメール「7号車のデッキにいます」。すぐに返信「同じ7号車です」。外の冷気がドアの隙間から吹きつけて堪え難かったが、近くに仲間がいると思うと励みになった。また森先生からメール「一本前の電車です」。一瞬、何を言っているのかわからなかった。いつの間に電車を変更？聞いてないよ。寒さが身にしみた。

身も心も寒さに震えながら会場に。鳴門教育大学の佐古先生による基調講演。内発的改善力について。文字通り内発に訴え、揺さぶる語り。唐突に質問された。答えをスライドに丸出しにしたまま質問する困った先生だった。そう答えると「見なかったことにして」。まったく困った先生だった。会場に笑いを誘ったこのやりとりで、大阪の空気の流れに入っていけた気がした。続いて、ピアノとチェロの演奏。美しい旋律が染み渡り、その流れに身をまかせた。

昼食は、ふらふらと外へ。いつもと違うところに来ると、いつもと同じ放浪癖が増幅する。見慣れないハンバーガーショップに入った。店員さんに「初めてなんです。お腹へってるんだけど、何がいい？」と訊いた。「こちら通常のバーガーの3倍になり・・・」。「(そ

りゃ無理)いえ、普通のでいいです」。おいしかった。レジェで「どうでしたか？」と訊かれた。お腹をたたいて「すっごい、うまかった」と答えた。はじける笑顔が返ってきた。大阪の流れに乗ってきた。

ラウンドテーブルでは書記役。最後にまとめをし、レポートを書かなければいけない。困った。報告は、いずれも意欲に満ちた熱いものだった。が、交わされる対話の断片はわかっても、いつもなら見えてくる流れが見えない。大阪の流れに乗り切れていないのか。焦っている時、同じグループだった佐古先生の顔が目に入った。

「内発的改善力」という言葉とともに、ここまでの流れが浮かんだ。「理念への共感に動かされた内発の物語」と「評価システムの浸透に動かされた外発の物語」の対照が見えた。終了間際にやってきた流れに救われて、まとめを乗り切った。

京都教育大学の水本先生による総括講演に耳を傾けながら、フォーラムの流れが何度も脳裏を巡り、それらが美しくデザインされたプロセスだったことを感じた。今日、ここで受けとめた何かがカタチになりつつあった。懇親会で気持ちよく酔いながら、カタチはユラユラと漂った。佐古先生とも話した。福井のラウンドに来てもらえるかもしれない。次への流れが生まれた。

翌日、レポートのラフをメンバーに、感想の依頼とともに送信した。すぐに感想が寄せられた。読みながら、独りで書いている時には見えなかった意味が浮かんだ。

文脈に奥行きが拓けた。あの日、ユラユラと漂っていたカタチに言葉を与えてあげられた気がした。仲間の感想にも、あらためて意味を発見している様子がかがえた。仲間とともにレポートを創っている感触があった。

寒さが身にしみた電車、流れに入れた基調講演、染み渡った演奏、流れに乗った昼食、乗り切ったラウンド、総括講演で浮かんだカタチ、漂った懇親会、仲間と意味を生み出したレポート。そして今、こうしてニュースレ

ターの原稿を書いている。省察が幾重にも塗り重ねられ、意味が生成し変容していく。点ではない、流れとしての現実を感じる。体験をともにした仲間にも同じことが起きるだろう。いつかまたどこかで、仲間と合流し、意味を生成しあえる予感と期待が浮かぶ。もしかしたら、視界に捉えきれぬ巨大な流れの中に、すでに私たちはいるのかもしれない。佐古先生から寄せられた感想は「次の報告を楽しみにしています」と結ばれていた。

## スクールリーダー養成コース2年／小浜市立雲浜小学校 富士 健一

本フォーラムへの参加は初めてでしたが、学校内外でこなさなければならぬ仕事や課題への対応に迫られてラウンド発表準備がまともに出来ず、おまけに当日の朝から乗車予定の列車のダイヤが乱れて到着が遅れるのではないかと気を揉んでいたせいもありとても気が重い中での出発でした。遠方での一日開催という限られた時間枠の中でどれだけ得るものがあるだろうかと思ながらの参加ではありましたが、結果から言うと学ぶことが多くとても満足いく内容でした。有意義かつ充実した時間を過ごすことができたこと、参加を勧めていただいた大学の先生方並びにフォーラム関係者の皆様に感謝申し上げます。

本フォーラムが有意義である一番の理由は、大阪教育大学と大阪市教育委員会、大阪府教育委員会との地域コラボレーションにとどまらず、鳴門教育大学大学院や福井大学教職大学院との外部連携や相互協力の上に成り立っていることです。フォーラムそのものが異なる者同士の「協働」の上に成り立っていることが大きな魅力だと言えます。私自身、本フォーラムで自分が語ったり様々な方の話に耳を傾けたりした時、バラバラに散らばっていたパズルのピースが徐々に組み合わさっていくような感覚を何度となく経験しました。福井大学教職大学院のラウンドテーブルでも感じることはあるのですが、今回のフォーラムでは、そのことをさらに強く感じるものが出来ました。自身の内的変化を短時間で実感できたのは、異なる者同士のコラボレーションが生み出すエネルギーの大きさというか、普遍的な教育的価値を探究しようとする人たちのベクトルの大きさというか、今、この瞬間の出会いを大切にしたいという「人が人をつなぐ力」が大きく働いているが故のことではないかと思えます。

鳴門教育大学院の佐古秀一先生の基調講演では、個人の力量形成だけにとどまらず、組織的な教育活動をどのようにして推進していけばよいのかという今日的な教育課題を「内発的改善力」によって「困難な学校」を「元気の出る学校」へと転換していくための理論と実践の具体を紹介していただきました。が、まさにそれは、福井大学教職大学院で学んでいる課題探求型プロセス重視の「協働」のあり方そのものでありますし、学ぶべき組織モデルの対象としている長野県伊那小学校の「内から育つ」という教育の根幹と共鳴する組織改善論でもあり、初めて聞いた話であるのに何度となく語り聞いてきた話のよ

うにすんなりと心に届きました。実践発表をされた大阪府内のお二人の校長先生や総括講演をいただいた同志社女子大特任教授の水元徳明先生のお話もそうでしたが、具体的な改善アクションをどれだけ組織内に分かりやすく示し、異なる価値を持ったメンバー同士がいかにかその方針やビジョンの共有を図って最善の結果を生みだしていくかというイメージとコンセプトが「学校経営」には必要なのだと思われました。

午後のラウンドテーブル（グループD：司会の鳴門教育大の前田洋一先生、記録の福井大学の山口真希先生、一般参加の岡山特別支援学校の宮内正志先生、大阪府立寝屋川支援学校の山中矢展校長先生、雲浜小の富士）では、山中校長先生と私が70分ずつ報告と意見交流を行いました。山中校長先生のご発表は教員総数170名の特別支援学校における小中学部と高等部の人的管理を「首席」（大阪府特有の役職であるミドルリーダー）を活用して行うことで組織改善を図っていくという経営者としての立場で語られたダイナミックなものであったのに対して、私の発表は教職員20名程度のごじんまりした規模の小学校における授業改善を中心とした「チーム雲浜」の生成を教務主任としてどう支えてきたのかというテーマでミドルリーダーとして語ったものであり、ある意味対極的な発表でした。しかし、語りと交流が進むにつれてあぶり出されてきたのは、「ミドルリーダーの立ち位置とその変容」というキーワードであり、学校を動かす人的財産をいかにして育て、ミドルリーダーを核にしながらいかにして「協働」を進めていけばよいのかということでした。活動している場所も立場も考えも違う者が行った2つの報告が共通した課題を持っていることを考察によってあぶり出し、浮かび上がった改善点を我が身の立場で再構成していくことの重要性をあらためて実感することが出来たすばらしい時間となりました。

福井県小浜市という狭い地域の中において日々の忙しさに忙殺されていると、広い視野で物事を見つめていく目が鈍ってきます。教職大学院2年目も残すところ3か月。休日に遠方まで出かけて教育について熱く語り合う機会は人生の中でそう何度もありません。今回のフォーラムで学び取ったことはもちろん、異なる立場や様々な価値を持った人と関わり合える機会をこれからも大切に、日々の教育実践に活かしていきたいと思えます。



## 東京ラウンドテーブルに参加して

教職専門性開発コース2年／福井市至民中学校

中村 諒

去年に引き続き、今年も東京ラウンドテーブルに参加させていただいた。今年はインターン先に視察で来られていた院生や福井県のラウンドテーブルで知りあった東京の学生、また昨年報告の際ご一緒させていただいたお茶の水女子大学の博士課程の院生など、幅広くつながることができ、ラウンドテーブルの広がりや東京でのつながりを感じた2日間となった。

1日目はZone Aに参加し、新たに教職大学院を立ち上げる大学の取り組みや報告を聴きながら、ますます全国的に教職大学院が広がりを見せていることを知り、教育界が盛り上がっていくことを期待した。

2日目の報告会では、牧田さん（NPO法人）・三好さん（お茶の水大学主事講習）・中村先生（玉川大学）の方々とテーブルを囲み、勉強させていただいた。

牧田さんの報告を受けて大きく気付かされた視点は「子育て＝母親にしかない特権の時間」という視点であった。日本の社会では妊娠して出産することにより、職場を離れるだけでなく、辞めざるをえない場合がある。そういった現状は本来おかしいのであるが、逆の発想で、学生からすぐ就職した場合、妊娠を契機に「もう一度自分のキャリアを考え直す時間が生まれる」と捉え直すことができるというものであった。この期間を牧田さんは「母親の特権」と呼ばれた。このお話しは一部ではあるが、牧田さんの報告を聴き、私は子どもが大人を繋ぎ、子どもが大人を成長させたり、時間を育ててくれるのだと感じさせられた。電車の中などで、子どもに目線があった知らない人がにこやかにほほ笑み「かわいいですね」等とおかあさんと話すことがある。この関係は子ども不在ではなしえないことであり、子どもが大人を引き付けあうのだと感じた。

三好さんの報告では、“気付いたことにより苦しくなる現実”という気付きを与えて下さった。社会教育の場においては、仕事を“こなす”ということが存在しない。地域や子どもやボランティア等様々な人をつなぎながら、人の成長や温かみを育むような仕事でもある為、問題も喜びも場面によって異なってくる。だから“こなす”ことは不可能である。ちなみに、これは学校でも同じであり、子どもたちの心の成長という評価しにくいもの、変化が見えにくいものを一番の目標としている面もある為、“こなす”ことは難しいのであると感じる。日頃の場面や子どもの体調や心の状態によって、必要な関

わりが変わってくるからであると感じる。以上のことから、こなす仕事を知らずに実践していると、現実の中で歪が生じ、その問題に気付くようになる。気付くことによって、これまでのやり方や方法を実践することが難しくなるといった繋がりがあると感じさせられた。つまり、気付いたことにより、ある場面に対する見方が変わり、やり方も変えようとする為、教師の成長が生まれ、結果として子どもも成長するといったことである。私もこの気付きを大事にしながら、成長できる人間になりたいと感じた。

私の発表は“地域連携を通して子どもの自己有用感を育む”テーマとして、報告させていただいた。報告の中で、至民中学校と地域の方々と共に実施しているお花一杯P J についての話になった。社会体験におけるさつまいも堀りやお花を植える作業等は、本来教員や専門職の方々が行うのが効率的には一番早い。ではなぜわざわざ子どもたちに実施してもらうか。それは、地域と触れ合い原体験を育むことや、地域とつながりを見出していくことなどたくさんの良さがある中で、普段学校内で埋もれている声に気付き、自己有用感を育む大きな契機となることではないかという気付きが生まれた。

勉強ができない為、学校の中で取り残されている感覚を抱く子ども、普段いつもノートをとって頑張っているが、なかなか目立たない子ども、そんな子どもたちの良さや温かさが、地域の方と触れ合い、活動する中で気づかされる。

教員が「手が足りないんや〜。助けて？一緒にやってくれないかな？」と“できないふりやお願いをする”行





為を通して、子どもたちが手伝い、助けてくれる。その結果教員に「ありがとう」と褒められ、喜ばれる。このやり取りや地域の方に褒めていただく中で、子どもたちの中に「自分は必要とされている。」「ぼくはこんなことができるんだ。」等自己有用感を育むことになるのではないかと感じた。つまり、物事や行事を“解決”することが一番の目標ではなく、その物事や行事に取り組む理由を考えながら、解決へと向かい試行錯誤するその“プロセス”に大きな学びが生まれるということではないかと感じた。

私もこれから一人一人が自己有用感を育てていけるように授業や学級づくり等あらゆる場面で子どもたちに働きかけていながら、神奈川県教員として、地域の方や学校や子どもたちと共に温かい学校づくり・地域づくりに力を入れていきたいと考える。

## 教職専門性開発コース1年／福井大学教育地域科学部附属小学校

### 山越 翔太

#### 外に学びを拓く、外の学びを得る

11月30日(土)と12月1日(日)に、明治大学で東京ラウンドテーブルが行われた。参加した動機は、正直“直感”である。“ここに行けば何かがある”という根拠の全くない勘に任せた決断だった。しかし、その勘は終わった今、“当たったな”と思う。東京まで出向いただけの成果を学び得られたと感じている。これから少し、私が学び得られたものを紹介しようと思う。

11月30日(土)の最初のプログラムは、「Zone A 学び続ける教師を支えるために」「Zone B コミュニティ学習支援コーディネーターの力量形成とその組織」の2つのゾーンに分かれての検討だった。私はZone Bに参加し、主に公民館の取り組みやそれに関わる職員の研修について、そして教育委員会と大学間の連携について考えていた。



富塚一資さん(水谷東公民館館長)、越智修さん(川崎市教育委員会)、熊野直彦さん(福井市教育委員会)の3名の話聞いて、福井県が行っている学校教育や公民館での取り組み、実践は、他の県のそれよりも発展しているということ、地域に密着してそれらが行われているということが分かった。しかし、私が特に思ったのは



福井県の魅力(良いところ、悪いところ)は福井県の中にいっただけでは、決して分からないということ。もっと、他の県の人たちと交流し、そこでどのような取り組み、実践が行われているのかを知り、比較してみる。そして、互いの県の良いところは取り入れていかないといけないということだった。

その後は、「Active Learning 実践交流」ということで、社会教育課程の学生2名の実践報告を聞いた。ここで1つ補足したいのは、社会教育課程というのは学校でいう教科「社会」を教えるための課程ではなく、公民館での地域コミュニティ機能を保持および向上を目的として様々な取り組みや実践を研究する課程である。そこには、公民館主事や博物館主事、図書館主事といった資格を取得し、地域に貢献していこうという人たちが集まっている。

伊藤央さん(東京学芸大学大学院教育学研究科修士2年)、早川葵さん(明治大学文学部3年)の2名の報告を聞いて、まず思ったのは2名とも「社会教育実習」を通して、短い実習の中で本当に深い学びを得られているということだった。特に早川さんの報告では、わずか12回(毎週金曜日)の公民館での実習から「子どもたちの学び(自主性について)」「子どもたちとの信頼関係」「異年齢交流」「地域の方と協力する(地域とのつ

ながら)」などを学び取っていたのには驚かされた。学びの量もそうだが、その質にも驚かされた「子どもたちの学び」については、中学高校生講座から子どもたちがどのような過程を経て、学び得ていくのかをしっかりと見取っていた。「異年齢交流」についても、自身の学校での経験と結びつけて、普通の学校での異年齢交流との違いに気づいていた点も見事だと思った。私自身も「異年齢交流」については、先日私が参加した福井県の中藤小学校で異学年交流の国語の授業を参観したことがあったので、それを振り返る機会になった。

12月1日(日)は、「実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聴き取る」ということで、5・6名程度のグループに分かれて、3名の報告を聞いた(内1人は私自身の報告である)。武蔵野市教育委員会の矢野さん、お茶の水大主事講習の藤田さんの報告を聞き、異学年の子どもたちが互いに影響し合い成長している。また、それを見取り支えるスタッフがいる構図は、学校と非常によく似ているなどと思った。特に、矢野さんの報告では、伝統芸能を若い世代に残していくというコンセプトで始まった企画の担当として、伝統芸能や活動そのものの「楽しさ」を追求しながら子どもたちと信頼関係を築いていきたいという思いと、高い技能を持つ後継者を育てたいという思いを持つ講師や保存会の方々と子ども

たちの保護者との間に挟まれて生まれた葛藤があることを話していた。これも一部の学校の教師たちが持つ悩みでもあると思った。授業を通じて子どもたちと信頼関係を築き、最大目標の「人格の完成」を目指したい教師とよりレベルの高い中学校、高校、大学へ進学させたいがために高学力、成績、結果を求める保護者がいる。学校現場でも様々な人たちの様々な思いが交錯している。

今回の東京ラウンドテーブルでは、子どもたちとの距離の取り方にしても、同様の悩みを持っているなど、子どもと関わる取り組み、実践に携わる人たちは皆、似たような思いを持っていることが分かった。大切なのはそれらの思いを共有し、互いの意見、考えをもとに解決の糸口を見つけることである。

また、地方の人たちは都心の、都心の人たちは地方の取り組み、実践を見てみる。それによって、その地方や都心の魅力が初めて分かることもある。新たな手立てやそのヒントが得られることもあるかもしれない。私自身は、もっと福井県から出て、他の県の取り組み、実践を見てみたいと思った。また、このようなラウンドテーブルの機会があれば、是非参加したいと思う。

## 教職専門性開発コース2年／福井大学教育地域科学部附属中学校

小川 駿也

### 学校教育と社会教育

～美浜体験学習と東京ラウンドテーブルに参加して～

2013年11月9日(土)、10日(日)の2日間、福井県美浜町の体験学習に参加した。これはNPO法人「はあとふる美浜ネットワーク」が主催し、教員志望者の学生を対象に、美浜町の自然や人々とかかわりながら、農業や酪農、民泊などの体験できるプログラムであった。私は専門教科が社会科ということもあり、生徒に上述の産業や地域について教える立場でありながら、自分自身にそのような経験が乏しいことから、今回の体験に参加することにした。

私が美浜町に対して最も強く抱いていたイメージは原子力発電所の町であり、原発マネーによって公共施設などが整理されていることであった。また、同じ教職大学院の孫野貴之院生や池田郁院生のように、人々が明るく、温かいイメージを持っていた。そして、実際の体験学習は漁港での魚捌き、三方五湖でのボート体験、牧場での酪農体験、猟師の方の家での民泊体験と獣害(山に入り、猟師の方が仕掛けてある罠や獣道などについて教わるとともに、鹿や熊などを山の生態系維持のために狩



猟していることをうかがった)、ビニールハウスでの花の手入れなどの農業体験があった。どの体験に関しても、自分にはイメージしかなかったため、「魚ってこうやって捌かれてスーパーに並んでいるのか。」「ボートって4人でリズムを合わせて漕がないと進まないんだな。」「牛ってこんなにも大きくて、餌の準備や糞の始末がこれだけ大変なんだな。」など、体験したからこそ、初めて実感することができた学びがあった。また、



体験学習の場所に行くたびに、「〇〇さんのところ行って来たの?」、「学校の先生になるのなら、こうしないといけな。」など、人々の温かさやつながり、学校教育や教師に対する期待を感じることができた。この体験を通して、美浜町に対するイメージが大きく変わるとともに、教師として、まずは自分自身が様々なことを経験し、人々とつながっていかねばならないと思うようになった。

2013年11月30日(土)、12月1日(日)には、東京ラウンドテーブルが明治大学で開催された。東京ラウンドテーブルは福井のラウンドテーブル同様、参加者同士が6人程度のグループで自分自身の実践について語り合い、それを捉え直す場であったが、福井と大きく異なるのは、参加者の大半は学校教育ではなく、公民館などの社会教育関係者ということであった。社会教育関係者の方々は、公民館で様々な講座を主催していた



り、被災地への復興支援をしていたりと、多様な人々とつながりながら、地域やそこに生活する人々のために活動されていることを知った。私は国政選挙のときなどにしか公民館に行ったことがなく、公民館がどのようなことをしているのか、また、社会教育とはどのようなものなのかということについて、これまで深く考えたことがなかったため、地域のためにこれほど多くの人々が活動されていることを知り、頭が下がる思いになった。一方で、社会教育関係者の方々の報告の中でよく聞こえてきたことは、「学校的な学び」、「子どもは学校しか知らないため、それ以外の場所に出たときに生きていけない」など、学校教育に対する否定的な見方であった。社会教育関係者がおっしゃっているように、学校教育においてそのような状況があることは否定することはできない。しかし、学校教育自体も変わろうとしていることを、今回報告する、教職大学院、福井大学教育地域科学部附属中学校における学び、そして、南アメリカの授業実践をもとに伝えておかねばならないと思った。附属中学校では、解明すべき主題を設定し、他者と協働しながらそれを解明していく「主題—探究—表現」型の授業を

行っている。では、なぜわざわざこのような授業を行っているのかと考えると、それは、生徒が飛び出していく現実社会では、原子力発電所などのエネルギー、TPPや日本国憲法の改正など、多様な立場や視点が包括され、自分たちの生活にかかわる問題ばかりであり、それらに対して「自分はどのように考えるのか?」ということ価値判断、意思決定していかねばならないからではないかと思った。学校教育で生徒に自ら考え、多様なものの見方や考え方をしている他者と協働し、自分の価値判断、意思決定の機会を保障していかねば、現実社会においてそのようなことをすることはできない。また、そのためにも、社会教育関係者の方々おっしゃるように、学校が学校で閉じているのではなく、生徒が多様な経験を積み重ね、自分自身のものの見方や考え方、可能性を広げていくことが必要であると思った。

今回の東京ラウンドテーブルの中で、社会教育関係の方が、次のようにおっしゃっていた。

「目の前に飢えているおじいさんがいて、あなたは魚を釣ってそれを与えますとします。これがヘルプ。一方で、おじいさんに木の枝と針を渡し、どうすれば魚が釣れるのかということを教える。これがサポート。ヘルプ的な学びばかりでは、その人は他者がいないと生きていけないけれども、サポート的な学びがあれば、自分で生きていくことができる。」

学校教育と社会教育。行政上ではそれらは別々に存在しており、お互いに交流する機会は少ない。しかし、本来、学校教育は社会教育(地域)に内包されているはずであり、それぞれを独立して考えることは不自然である。東京ラウンドテーブルでは、学校教育と社会教育、それぞれの実践を語り合うことで、目指しているものは共通しているということを確認することができた。教師は学校人である前に地域人であるという意識のもと、これからも実践を積み重ねながら成長していきたい。



## 愛育養護学校（特別支援学校）を訪問して

教職専門性開発コース1年／福井市中藤小学校

天谷 美怜

愛育養護学校訪問は、「生きる力」とは何かを改めて考えさせられるきっかけとなりました。

私は小学部の中学年で過ごすことになりましたが、担当の子どもが決まっておらず、時間割が無いため見通しをもてず、戸惑った結果、まばらに登校してくる子どもたちと思うままに一日を過ごすことにしました。子どもたちと一緒にニワトリのえさを撒いたり、トランポリンをしたり、歌ったり、お面を作ったり、おばけやしきのお客さんになったり、たこ焼きやカステラ作りを手伝ったり、勉強のお手伝いをしたりしました。ひとりの子どもと徹底的に関わることは無く、まるで私も愛育養護学校に通っている子どものひとりようになってしまいました。それどころか、あまりの自由さに、ここは学校であるということも忘れてしまいそうでした。

子どもたちと過ごしている間、私は疑問を抱えていました。それは、「この子どもたちは、社会で生きていくための力をつけることができているのだろうか」という疑問でした。学部時代に1か月間だけ、特別支援学校で教育実習をした私にとって、特別支援学校とは「決まった日常を、みんなと一緒に丁寧に繰り返す」場所でした。先生方は子どもたちが社会に出て生きていくことを願い、あいさつ、自分のことは自分です、決められた仕事をする、クラスのみならず一緒に行動する、といったことを身につけられるように支援していました。それに加えて、その子の好きなことや得意なことを伸ばしていこうと様々な仕掛けをしていました。私は実習を通して、決まった時間を、決まった場所で、決まったメンバーで、ルールを守り、見通しをもって過ごすことができる力を、社会で生きていくために最低限身につけなければならないと思うようになりました。そしてそれは特別支援学校に限らず、小中高その他どの学校でも同じであると考えていました。しかし愛育養護学校には、決められた時間も、いなければならない場所も、決まったメンバーも、やらなければならないこともありません。子どもたちは自分が過ごしたい場所で、そこにいる人と過ごした

り、一緒に過ごしたい人を誘ったりして活動していました。先生方が子どもたちの求めを受け入れることで、みな生き活きと活動していましたが、ここを卒業してから、先生方のいない別の環境でどのように生活するのだろうかという疑問を感じずにはいられませんでした。

一日を過ごし、先生方のお話を聞いて感じたことは、先生方が子どもの力、そして子ども同士の力を、強く信じているということでした。先生方はこちらから意図的な関わりをどんどん仕掛けていくのではなく、子どもたちの求めに気づき、受け入れられる限り受け入れて、一緒に過ごしていました。それは一見何もかも容認しているように見えますが、そうではなく、先生方はその子にとってのその行動の意味を考え、ありのままを受け入れようとする姿勢を貫いているようでした。そんな先生方と日々を過ごす子どもたちは、外部からやって来るたくさんのボランティアの方や、突然訪問した私たちを警戒することなく、信じて、関わる力を身につけていました。

私は小学校での日々のインターンの中で、集団のルールや先生の指示通りのことはできるものの、自由度が上がると自信をもって行動できない子どもたちを見て、これでいいのだろうかと思うことが増えてきていました。ほとんどの学校では、集団のルールや先生の指示に従って動くことを土台とした上で、子どもたちの自主性を育てようとしているように思います。しかし愛育養護学校では、まず先生方が子どもたちを受け入れ認めることで、子どもたちは自分から求め、自分で考え、自分で決める力をつけていました。そしてその土台をもつことで、人を信じたり、頼ったり、一緒に楽しんだり、優しくしたりする力も育っているようでした。その力が、この学校を出て、別の環境でも生きていける力となるのだと思いました。

愛育養護学校で一日を過ごし、私の考える「生きる力」は、いつの間にか「人に合わせてうまくやっていく力」になってしまっていたことに気づきました。そうではなく、「自分でやりたい



ことを見つげられる力、そして人を頼ったり受け入れたりすることができる力」こそ、「生きる力」ではないかと改めて考えさせられました。先生方がそのような願いを強くもち、子どもたちの「生きる力」を育てようとしていることに気づき、愛育養護学校は子どもが自由に遊びまわっている場所ではなく、まぎれもない学校であると思いました。愛育養護学校のスタイルは、共通の強い思いを持った先生方の連携、工夫された校舎、私立の小規模校であることなど、様々な要素によって成り立っていると思います。しかし、特別だからと割り切るのではなく、その先生方の思いや考えから学ぶべきことはたくさんあると感じました。

学校で何十人もの子どもを一人で動かさねばならない立場になると、いつの間にか集団行動を最重要とし、それに反する行動は「周りの人のこと

を考へろ」と規制し、子どもたちひとりひとりの思いが見えなくなってしまう時があります。しかし本当に周りの人のことを考えて動くためには、ただ人に合わせる力ではなく、自分の考えをもち、自分のしたいことや周りの人のしたいことを考え、今自分がすべきことを決められる力が必要であると思います。そういった力が学校で子どもたちにつけさせたい、「生きる力」なのではないでしょうか。学校教育が育もうとしている「生きる力」とは何か、「確かな学力、豊かな人間性、健康や体力」といった言葉を理解するだけでは、いつの間にか見えなくなってしまうかもしれません。愛育養護学校の先生方のように、ひとりひとりが考え続け、目指し続けなければならないのだと思いました。

## 教職専門性開発コース1年／啓新高等学校

### 船木 知憲

#### 愛育養護学校での学び

1月22日、愛育養護学校での学びについて報告をします。

まず私は、特別支援の免許は持っていないのですが、特別支援教育に教育の原点があるという信念のもと、今回参加をさせていただきました。

学校に到着して、子供たちと触れ合っって第一に思ったことは、どの子供たちもとてもいきいきした顔をしているなあということです。その笑顔がなぜなのだろうという疑問を持ちながら一日を過ごしました。

愛育養護学校は一日の時間割がありません。それぞれが活動をしたい時間帯に学びを始めます。それも誰かから言われてするのではなく、自分が好きなことをとことんすることが学校生活の中心となっていました。例えば、ウルトラマンごっこをする子供、電車遊びをする子供、好きな音楽で飛んだり跳ねたりする子供など十人十色の過ごし方をしているようでした。

それに比べて通常学級の子供たちはどうでしょうか。社会で望ましいとする勉強を好き嫌いかは抜きにして、小中高とずっと続けてきています。それに適応できている子供は問題ないのですが、躓く子供はどうでしょう。やりたくないことをひ

たすら強要され続けているような印象を強く受けます。彼らの多くは自分の好きなこと、熱中できることを教育の現場で見つけることができずにいます。社会全体として、勉強のできる人間が成功するというような概念がどうしても定着してしまっているのが、勉強のできない生徒からしてみれば絶望感すら起こりうるかもしれません。その結果として、問題行動に走る子供が出てきても自然なことなのかもしれません。

私自身も高校時代は、進学校で勉強に苦勞し、劣等感を覚えることがありました。大好きな陸上競技があったから、多少報われるところがありましたが、どれだけ陸上競技を頑張っても勉強ができ、大学に行けることが最大の価値であるというような雰囲気が学校全体にはあり、心の中には常にモヤモヤした気持ちが残りました。

その点、愛育養護学校の教育方針は、子供たちの個性を尊重し、自己肯定感を高める配慮がされているのだと思いました。一見、子供たちの好きなようにさせているように思えて、実際は学校の職員全体で共通のビジョンを持って接しておられるのだろうなということも感じました。

そして、短期的な目線においては結果がわかりにくいかもしれませんが、長期的な視点、すなわち『一人の人間の一生』という観点においては

幸せなより良い生活につながる教育なのではなかろうかと私は考えました。

最後に、愛育養護学校の子供たちは皆がとても眩しい笑顔をしており、その表情に心が洗われるようでした。あのような笑顔は心から幸せでないと思えないものだと思います。教育の形や方針はいろいろありますが、あの笑顔は愛育養護学校の素晴らしさの全てを語ってくれたような気がしま

す。私も愛育で学んだことをもとに、私に関わる高校生たちにも活躍の場を与えて、彼らを心から笑顔にさせてあげられる、よりよい人生を送るためのチャンス作りをする教育を目指していきたいと思えます。

## 教職専門性開発コース2年／福井東特別支援学校

### 堀江 春那

#### 愛育養護学校の

#### 子どもの姿からの気づき

私は昨年度も体験させていただき、先日は2回目の体験になります。昨年度の私は、子どもの行動の背景にある思いを丁寧に考えていく先生方の姿勢に感動しつつも、その理念に少しの疑問を持っていました。「人を蹴らないなど他者とのかわりにおける最低限のルールなどは守らせなければいけないのではないか」「卒業後の社会の中で適応していけるのだろうか」というものです。しかし、先日の体験での子どもの姿によって昨年度のそれらの疑問が解消され、自分の中で納得のいくものになりました。

私は先日の体験で、小学1年生のはやと君（仮名）と長い時間一緒に活動させて頂きました。はやと君に誘われて一緒に滑り台を滑ったり、本をたくさん出したり、その中で気に入った本と一緒に読んだりしました。はやと君とのかかわりの中で、強く感じたのは思いの明確さとかかわり方のうまさです。はやと君は自分がどのような遊びがしたいのか、私にどうしてほしいのかをはっきりと持っているように見えました。そして、それを私に伝える方法で伝えてくれました。伝え方も様々で、初めは私の手を毎回引っ張っていたのが、次第に指さしで示すようになっていたり視線を送るだけになったりしました。

私は現在、重度重複障害のある生徒たちのクラスで実習をさせていただいています。生徒たちの中には、思いを自分からは伝えられない生徒や先の予定を細かく確認する生徒がいます。私は次第にその生徒たちに、もっと自分で自分の生活をつくっていく力をつけてほしいと願うようになりました。はやと君をはじめ愛育養護学校の子どもた

ちを見てみると、周りのいろいろなことに関心を持ち、自分で行動を決め、周囲の大人や子どもとかかわりながら生活しているように見えます。その姿を私はたくましく感じました。また、自分の「やりたい」と他の子の「やりたい」がぶつかった時には周りの大人と協力しながら自分を調整している様子も見ることができました。それは、子どもの「やりたい」と大人の「ダメ」がぶつかった時とは違って、自分も相手も尊重するような姿に見えました。

愛育養護学校の体験をさせて頂いた後、普段かかわっている生徒たちとの自分のかかわりを振り返りました。その中で、自分が生徒に「このような題材でこのような動きならできたら」「このような行動をしてほしい」とつい考えてしまい、生徒の思いを聴いていく姿勢や「やりたい」思いに沿っていく姿勢が足りなかったと反省しました。また、生徒の予想外の行動についても「なぜその行動をしたのか」「どのような思いで行動したのだろうか」ということを考えていなかったと気づきました。実際、授業で見られた生徒の動きに対し「なぜ、どのような思いで」という視点でビデオを見返した時、初めて見えた生徒の姿もありました。改めて生徒の行動の背景にある思いを考えていく必要性を実感し、さらに今後の生徒とのかかわりに活かしていこうと思えます。

# 拠点校だより

## 福井市中藤小学校

佐野 恭子

今年の4月から新築移転開校により、各学年ごとにオープンスペースを配した開放的な造りの校舎での生活が始まりました。子どもたちは、ゆったりしたグラウンドに木の香りが漂う明るい校舎で、近くのクラスの様子を感じながら元気に生活してきました。

本校は、「一人一人が輝き共に学び合う」の研究主題のもと、さまざまな仲間と互いに考えを高め合えるように、自分の学級集団だけでなく、隣のクラスの仲間や学年の仲間、担任以外の先生、地域の人々などに関わりながら学習してきました。春から模索してきた研究の様子を子ども達の授業の実際としてさまざまな先生方に公開する公開研究会を11月19日に開催しました。市内はもとより、県内各地から約100名の先生方に参加していただきました。

高学年では、6年生の2クラスが学級を解いて、国語の学習を行いました。「読み取ったこと、感じたことを表現しよう」という単元で、自分が気に入った絵について感じたことを、同じ絵を選んだ仲間がグループを組んで交流し合いました。



中学年では、3年生と4年生の国語科の異学年合同学習を公開しました。3年生が「物語を書こう」で学習したことを活かして創作した物語を、4年生が読んで感想文を書くという学習でした。4年生は「自分の体験と結びつけて」の学習を通して感想文を書く視点を学習してきたので、その視点から3年生の物語に感想を返すという授業でした。

低学年では、2年生が生活科「聞いて 聞かせて まちのすてき」で、夏から秋にかけて2回行った町たんけんで見つけた地域で働く人のすてきなところを発表会で

伝えるために、発表を見合い、良いところやさらに改善するとよいところを見つけていく授業でした。



参観された先生方からは、「チャレンジングな提案授業が素晴らしい。ぜひ続けてほしい。」というご意見を多数いただきました。「先生方が検討を重ねて作り上げた授業であることが伝わった。」「指導案がよく練られていた。」という意見もあり、学年団を中心にして低・中・高学年部会で協働して授業づくりに携わってきたことが成果として出ています。

授業後は、全体会で研究の方向性を示した後、低・中・高の各部会の各会場に分かれて、授業研究会をもちました。本校職員と参加された先生方が5～7人程度の小グループに分かれて、じっくり協議し合うことができました。



私が司会を務めた低学年部会での協議では、子どもたちが暮らす中藤島地区に愛着をもっていくために、保護者の協力を得て子どもたちが地域とつながるきっかけをつくっていくことが大切だという意見が出されました。そのために、教師が協働して単元構想を進めることを大



事にしていくことが確かめられました。また、今回の生活科では、4学級を解いてグループを組み、発表に向けて取り組んでいます。自学級の以外の子どもたちも支援していく難しさがありました。しかし、2年生の学年団が協働して単元を構想し、子どもたちが意欲をもって学習するための細かな手立てを積み重ねていくことで、まるで1つの学級のような落ち着きをもった学習集団として活動できていました。他の部会でも「他学級の先生が、自分の学級の児童のように子どもを語ることに感心した。」という感想をいただき、協働して授業づくりを行っていくことで、「学級」という壁を越えて多くの教員ですべての子どもたちを見ていこうという姿勢が自然と現れているのだらうと思います。

校内においても、「学級を解く・異学年合同の学習によって、子どもたちが意欲的になることを実感できた。」という意見が多く、確かな手応えを感じることができました。なによりも、低・中・高学年部会を中心として、単元構想から検討し合い、協働で授業作りを進めたという経験ができました。

この授業研究会には、夏の部会から授業づくりに協力してくださった福井市小学校教育研究会の先生方も参加されました。授業構想の段階から他校の視点からアイデアや率直なご意見をいただくことができました。そして、拠点校として教職大学院のスタッフにも、春の低中高学年部会から参加していただき、アドバイスももらってきました。公開授業に向けても事前の検討会やブレ授業に参加していただき、継続的に授業づくりに関わっていただきました。そして、公開研究会当日は、教職大学院から19名もの先生方が参加していただき、授業研究会は教職大学院のカンファレンスのような雰囲気でした。

今回の公開研究会は、本校にとっては新たなスタート地点に立ったような感じです。今後は、公開研究会に向けて取り組んできたことを検討し直し、来年度の研究につなげていけるように、校内での協議を深めていきたいと思っています。

## 福井大学教育地域科学部附属中学校

木下 慶之

### 2年次サブテーマが決まりました!

### 「協働の学びの場を問い直し、学びの練り上がりを生み出す」

福井大学教育地域科学部附属中学校では、昨年度より、第IX期研究主題「学びをつなぐ《探究するコミュニティ》」の解明に向け、教育実践をもとにした協働研究に取り組んできています。去る6月には、1年次サブテーマ「省察を捉え直し、次なる学びに生かす」をもとに研究集会を開催いたしました。その後は、A B C D各小部会の研究会や提案授業、各教科の後期公開授業をもとに、さらなる授業、教育研究を行ってきました。授業研究会で皆さんから出てきた成果や課題などをもとに、教育実践研究会において約3ヶ月の話し合いを重ね、11月にこの2年次の新サブテーマを設定しました。

本校では、「主題-探究-表現」型の学習スタイル、そしてその探究サイクルとして「発意-構想-構築-遂行・表現-省察」を共通のプロセスイメージとして、ロングスパンの単元展開構想に基づいた授業づくりに全教員で取り組んでいます。

私自身、以前は研究の発展という、「最先端の新しいことに挑戦していくこと」だというイメージがありましたが、赴任4年目にして少しずつ変容してきました。

教員が入れ替わってもこれまで作りあげてきた教育理念の根本を守りつつも、新たな挑戦にも取り組んでいく、本校の研究は、「温故知新」的な発展を心がけていると思います。もちろん子ども達や教員メンバー、環境や時代が変われば、実践の形も少なからず変わってくることもあるかと思っています。ただ、そんな時でも、付け焼き刃、場当たりの実践にならないように、本校の教育は何を大切にしているのか、どんな子どもたちに育てほしいのかを、常に協働で問い直し、理論だけでなく、実践や子ども達の見取りをもとにその理念を再構築していくことを大切にしている、というのが本校の研究体制の特徴ではないかと思っています。

さて、本校では「コミュニティ」「協働」という言葉がよく使われます。ただ、その言葉を私たち教員はどのような共通認識で共有できているのでしょうか。まず、「グループ活動やペア活動などをすれば協働なのか?」、「コミュニティとは何なのか?」「コミュニティと協働のちがいは?」「我々がめざすべき協働とは?」という、各実践をもとにした議論がなされました。「子ども達にとって必然性のある協働の場」、「子



子ども達の学びが繰り上がる協働の場」とはどのような場面、環境なのかを探っていこうと「協働の学びの場」が新サブテーマでもキーワードとなっています。

また子どもの学びの見取りについても、課題となっています。どのように子ども達の学びを見取り、さらに見取りから「学びの繰り上がり」を見出すことができるのか、またそれを子ども達にも実感させられているのか。2年次は、各教科における「学びの繰り上がり」とは何かに重きを置き、本校の各教科のめざす学びである“核となる学び”を捉え直すことにも取り組み始めています。各教科では3年間を通してどのような子どもを育てようとしているのか、また全教科で併せて見た場合、その方向性については共有すべきところや、相違点、課題はないのかを吟味していくことになりました。「なぜ、一般的に用いられていない言葉を使う必要があるのか?」「子どもたちの中に何ができるようになって繰り上がったと言うのか?」「どのような状態が教科としての学びの繰り上がりと言えるのか?」など、教員みんなが対話しながら、いろんな視点で見つめ、捉え直していくことでさらに課題を深く考えるおもしろさが本校の協働研究にはあるなあと実感します。

私は理科担当なのですが、理科では「しくみを解明し、自然観を広げる」を“核となる学び”としています。「科学観」と「自然観」の違いは何か?能力や力を身につけるではなく、「観」である意義は何か?などについて、他教科から問われることによって、より自分たち教科部会として価値観を寄り添わせ、共有認識として捉え、実践を展開していくきっかけとなりました。

最後に、本校では気軽な授業公開を実践研究の基盤としています。今年度の授業公開数は現在100を越えようとしています。授業公開学級と授業者の先生と教科について、小部会の先生から職員朝礼でアナウンスされ、また研究掲示板にも研究主任から情報が貼り出されます。単元全体を公開して下さるこ



職員室の研究掲示板には、授業公開が掲示されます。

ともあり、単元を通じての子ども達の変容を見る機会も得られます。参観については1時間ずっと参観するのももちろんいいのですが、ちょっとだけ参観（途中入室退室）でも構いません。教師の手だてを中心にみるのではなく、子どもたちの学びを見取ることを目的としています。そして授業後に、授業者や共に参観された方と見取ったことをもとに交流しています。何気ないことですが、子ども達の学ぶ姿や他教科での実践から学び得たこと、それを自身の授業実践につなげることを本校では大切にしており、今後も継続、発展させていきたいと考えています。

来年度の研究集会は平成26年6月6日（金）を予定しております。また今年度は来年1月に、後期公開授業（保健体育科・技術科・理科・学校保健科）も催します。他校の先生や地域の方々とも学びをつなげて実践していきたいと考えております。ぜひ御参観いただき、教育実践、研究について膝を交えて共にお話をできましたら幸いです。

## 連携校だより

### 福井市灯明寺中学校 佐々木 徳之

福井市灯明寺中学校は、福井市の北部、九頭竜川沿いの新興住宅地に位置し、特別支援学級を含め17学級、生徒数500名、教職員37名の中規模校です。学校名は名将新田義貞終焉の地、灯明寺畷にも出てくる歴史あるものです。今年で創立64年を数えます。「研学・振気・愛敬」の校訓のもと、学校教育目標に「自主的で活力に満ち、心

豊かで誠実な生徒の育成」、目指す生徒像として「思いやりのある生徒」を掲げ、生徒と教師が一体となった活動が特徴です。

ここ数年、生徒達は落ち着いて生活するようになり、それは生徒会活動や部活動の充実につながっています。それも、教員集団が「黙読（朝読書）・黙働（昼清掃）・黙

想（夕方の振り返り）」を軸とした生活習慣『灯中三黙』を大事にし、全校体制で取り組む大切さを共有して活動に結びつけてきた成果だといえます。さらに、生徒会を中心とした色別活動（異学年縦割り活動）や部活動全体の意欲的な取り組み等、年々進歩する生徒の活動の陰には、必ず教員集団のビジョンの共有と熱意、細かな配慮があり、教員同士も意見を交わし合い、試行錯誤しながら思いを共有して互いに高め合っています。また、生徒と教員の距離が非常に近いことも特徴です。共に活動しながら親身になって相談に乗る教員と、人なつこく純粋にがんばる生徒。普段から目にする教員と生徒との様子から非常によい関係だと感じています。しかし生徒集団も教員集団も日々変化してきています。また、あいまいだった（これまでは目をつぶっていた）ところもあり、新しい段階にきているともいえるでしょう。特に小中連携を含め、研究テーマも新たな段階に来ていると感じている教員も多くなったので、今年度から「学びの(力を育てる)研究」を深めることとなりました。

まず今年度は、「学び」を深めていくために個人毎にテーマを設定してもらったところ、いくつかの方向性が出てきました。そこで7月に全体研究会を開きビジョンを共有しました。そしてさらなるテーマの絞り込みを行ったところ、「主体的に取り組む力」を高めることを中心に研究を進めることになりました。今年度の取り組みの大きな柱として、まずは学習研究部をつくり、学習会を設定しました。「学ぶことの主役は自分自身である」という自覚を高め、「学びの環境は自分たちでつくる」という意識を持ち学習に取り組ませたいと考え、「学習会」（従来からあった学年会主催で定期考査前に行うもの）の他に家庭での学習習慣をつけるための「特別学習会」を設けました。これは昨年度の反省から出てきた案で、家庭学習に取り組む習慣がない生徒、十分な取り組み

ができない生徒が多く、それが学校での学習のつまずきの元となっているという意見に起因しています。家庭学習の習慣をつけさせることは、大きな課題だと以前から考えていた家庭や学校からの強い要望を受けたものです。現在はほぼ毎週実施していて、生徒間にも「課題は期日までに仕上げよう」という機運が高まっているように感じられます。さらに生徒の希望する教科の学習会や質問会、学力を伸ばそうと自主的に学習するグループなど、学校全体へと輪が広がっています。参加した生徒は、分からないことが分かるようになった喜びや、集中して学習できた自信を深めていて、次の学習への意欲につながっています。また、生徒指導上にも良い影響をもたらしていると感じます。

11月の指導主事訪問では道徳の提案授業後に研究会を行いました。参観した教員は小グループに分かれて、生徒の「学び」の姿について付箋に書き込み、それを元に話し合いを行いました。小グループに教職大学院の先生方を交えた話し合い活動で、学び合いながら成長する姿はこの数年で定着しました。「少人数のグループでの話し合いは意見が出しやすくてとても良かった。」ここでの教員の学びは授業にも生かされています。学級でグループ活動を行っても、すぐに机をそろえ意欲的に活動に入ることができる環境は、教員達の継続的な活動による学習形態の定着を物語っています。今後も議論を重ねながら学び続ける教員集団を目指していきたいと考えています。

現状としてうまくいっているようですが、お互いに授業を見合う機会を増やすことや、学校文化をステップアップしながらいかに学校歴の短い教員に受け継いでいくかは課題でもあります。

## 鯖江市鳥羽小学校

中道 優子

鯖江市鳥羽小学校は市の最北部に位置し、児童数490名（12/1現在）、クラス数20（特別支援学級3クラス含む）という鯖江市では規模の大きい学校です。

「よりよく人と関われる子どもの育成」を学校教育目標に掲げ、日々教育実践にあたっています。目指す児童像は、子供たちにも浸透しやすいように『鳥羽のんジャー5』と名付け、キャラクター化してあります。、入学式や体育大会などでは、この鳥羽のんジャーに子供たちが扮し、行事を盛り上げてくれています。このキャラクターは子どもたちからデザインやアイデアを募り、決定したものです。

### 【めざす児童像】

えがおいっぱい

鳥羽のんジャー5





今年度は、鳥羽るんジャーレッド・ピンク・イエローに関わるあいさつ運動や清掃活動を充実させています。集団登校班による朝のあいさつ運動を順番に行い、全校児童が校門に立ってみんなにあいさつをする機会を設けました。この経験により、すすんであいさつすることやあいさつをかえすことの大切さを子どもたち一人一人が身をもって感じたようです。また、清掃においては、委員会活動として清掃前の黙想を徹底させる取り組みを



行ったり、「ぞうきんコンテスト」や「おそうじがんばり賞」を強調週間を定め取り組んだりしました。「ぞうきんコンテスト」では、学期ごとに新しくぞうきんを入れ替えた日から一週間でのどの子が一番ぞうきんをよごしたかを見比べ、清掃場所ごとに一人ずつ入賞者を選びました。この取組では、「ぞうきんをよごすくらい一生懸命そうじをする」というようにめあてを明確にしたため、一生懸命清掃に取り組もうという活動意欲につながったようです。

今年度本校の研究として、特に力を入れて取り組んでいるのは「ユニバーサルデザインを取り入れた授業づくり」です。これは、クラスの全ての子どもにとって分か



りやすい授業を目指し、各教科の基礎的・基本的事項の定着を図ることを目的としています。1学期はまず取りかかりとして、ノート指導のためのお手本を作ったり、子どもたちが目にする掲示物を整えたり、授業中に用い

る絵カード・指示カードを作ったりと、いろいろなグッズを一つ一つ教員たちの手で作っていきました。夏期休業中には、鯖江市学級経営研究講座で筑波大学付属小学校の桂聖先生の話をお聞きしたり、校内で研修会を開いたりしました。2学期からは授業づくりに関する学年会を月1回程度設けて、教員の研修をさらに重ねています。今年6月と11月に行われた指導主事訪問での共同参観授業では、いずれもユニバーサルデザインを意識した授業が提案されました。学習の見通しを子どもたちにもたせるための本時の流れの示し方や構造化を図った板書、明確な指示の与え方など、いくつも新しい挑戦が埋め込まれていました。授業に至るまでには、研究部会や学年会などで何度も話し合う機会をもち、授業作りへの共通理解を深めてきました。手探り状態ではじめたユニバーサルデザインを取り入れた授業づくりが、教員相互の学び合いを生み出すことになりました。授業後の研究会には教職大学院の先生方も参加してくださいと貴重なご意見をいただくことができました。その中で気づいたことは、「ユニバーサルデザインの授業づくりにおいて大切なことは、ただ環境面、スキル面を整えるだけではないこと」、「教師側の目線で授業をつくるのではなく、子ども側の目線に立って授業を考えること」です。同時に、私が大学院で学ばせていただいた、「授業の中で『子どもの学びを見取る』という視点」の重要性を改めて感じました。子どもたちが学び合う学校は、教員同士が学び合う学校でもあるということのを再認識し、これからも実践に取り組んでいきたいと思っています。



# 語る 静岡の教育 WORLDに

2014.1.25(Sat)PM1:45~4:15

〈PM1:30受付開始〉

ホテルアソシア静岡4階「カトレア」(JR静岡駅北口徒歩1分)

公開シンポジウム

## 『成長し続ける教師』と静岡の教育

—新時代を担う学校と教育行政のあり方を考える—

〈趣旨説明〉————— 梅澤 収 静岡大学教育学部長

〈シンポジスト〉

- 佐藤弘毅 文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長  
「教員養成の高度化に関する文部科学行政の方向性」
- 興 直孝 静岡文化芸術大学理事、教育行政のあり方検討会座長  
「教育行政のあり方検討会の問題意識と方向性」
- 小松郁夫 常葉大学大学院教授  
「大学・教職大学院の取組と教員の成長」
- 武井敦史 静岡大学大学院教授  
「『成長し続ける教師』と学校」

〈コーディネーター〉— 山崎保寿 静岡大学大学院教授

〈情報交換会〉————— tea session (無料)

静岡大学教育学部

お問い合わせ先: sympo2014@tamari-ba.net

【後援】静岡県教育委員会/静岡市教育委員会/浜松市教育委員会  
独立行政法人教員研修センター教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

# 聴き合おう 教師の成長 WORLDに

2014.1.25(Sat)AM10:00~12:30

〈AM9:30受付開始〉

ホテルアソシア静岡3階「駿府II」(JR静岡駅北口徒歩1分)

ラウンドテーブル

## 教師の力量アップを支える学校

—実践研究ラウンドテーブルin静岡—

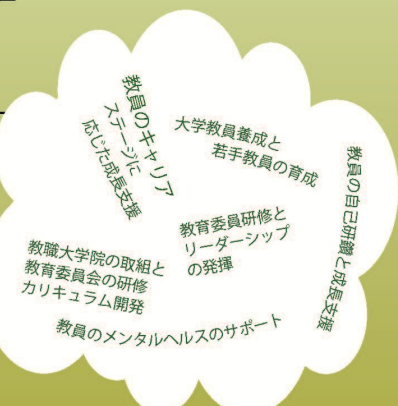
〈タイムスケジュール〉

- 10:00~10:10 はじめに
- 10:10~10:20 グループで自己紹介  
(名前、所属、試みてきたことを簡単に紹介)
- 10:20~11:20 実践の報告と意見交換①
- 11:20~12:20 実践の報告と意見交換②
- 12:20~12:30 グループごとにまとめ

\* 教師の成長(A)と学校のマネジメント(B)のグループに分かれて話し合います

ラウンドテーブル?

…少人数のグループ(7人程度)で、実践についてじっくり  
振り返って語り、聴き合い、話し合うことを通して、学び合います。  
未来を展望する為に、実践を共同で振り返ります。悩みやとまどいも  
語れるよう、経験や年齢にかかわらず語り合えるよう、お互いを尊重して  
参加することが大切です。



静岡大学教育学部

お問い合わせ先: sympo2014@tamari-ba.net

〈共催〉福井大学教職大学院  
【後援】静岡県教育委員会/静岡市教育委員会/浜松市教育委員会



主催 ; 宇都宮大学教育学部附属教育実践総合センター地域連携部門 (スクールサポートセンター)  
共催 ; 教師教育改革コラボレーション

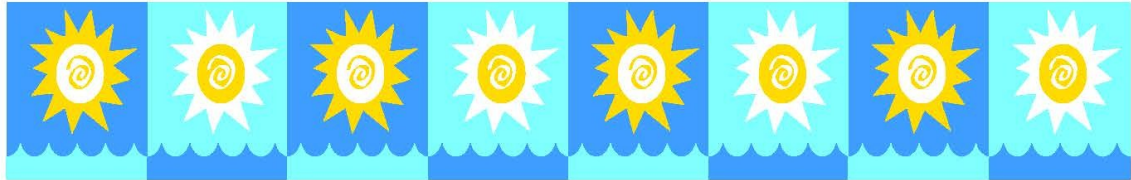
## 平成 25 年度 大学との連携による学校活性化フォーラム

～校内授業研究を元気にする～  
テキスト

宇都宮大学教育学部が、教育委員会や学校と連携して行ってきた校内授業研究の成果を持ち寄って検証し合うフォーラムを今年度も開催します。

前回から、福井大学を中心として発足した「教師教育改革コラボレーション」事業の一環としても位置づけていますので、他大学の先生方や大学院生（現職派遣を含む）も加わります。これまで以上に視野の広がる会になるでしょう。

日時 : 平成 26 年 2 月 8 日 (土) 10:00~16:50  
場所 : 宇都宮大学 教育学部 (峰キャンパス)  
参加費 : 無 料



### プログラム

9:30 - 10:00	受 付 (教育学部 A 棟 入り口)	
10:00 - 11:30	<b>学生・院生交流</b> 現職派遣を含む学生・大学院生同士が研究や実践の情報交換をします。教員の方もどうぞ。	<b>連携研修事業研究会議</b> 宇都宮大学教育学部と連携している市町教育委員会との研究会です。一般の方は参加できません。
11:30 - 12:30	昼 食	
12:30 - 14:00	<b>開会行事</b> 主催者挨拶 宇都宮大学教育学部長 藤井 佐知子 <b>パネル・ディスカッション「教師教育の高度化に向けて</b> <b>—宇大の教職大学院構想—</b>	
14:10 - 16:30	<b>教育実践について語り合うラウンドテーブル</b> 参加者が 5 人程度のグループに分かれてテーブルを囲み、授業改善や学校研究などの教育実践を率直に語り合い、意見交換をします。	
16:35 - 16:50	<b>総括</b> 他大学の先生方から、栃木の取り組みについて講評・感想をいただきます。	

# 実践し 省察する コミュニティ

*Fukui Round Tables:  
Spring Sessions  
For Reflective Practice  
And Organizational Learning  
in University of Fukui*

*For Communities of Practice and Reflection* since 2001

専門職として学び合うコミュニティを培う

日本の教師教育改革のための福井会議2014  
3/1(sat) 12:40-17:20

実践研究福井ラウンドテーブル2014spring session  
3/2(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V（教育系1号館）

探究する学びを実現する教師  
教師を支える教職大学院  
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/  
実践と研究を結ぶ  
新しい実践研究組織とそのネットワーク



## 2014.3.1-2

教師教育改革コラボレーション

福井大学教職大学院

大学院教育学研究科教職開発専攻

共催 福井大学高等教育推進センター・教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム



# 3/1 (sat) 12:40-17:30

## 専門職として学び合うコミュニティを培う

### For Professional Learning Communities

日本の教師教育改革のための福井会議 2014

- A 学校：世代を超えて協働する学校
- B 教師：教職大学院をイノベーションする-実現化に向けた課題と方策-
- C コミュニティ：学び合うコミュニティを培う—持続可能なコミュニティをコーディネートする—
- D 授業づくり：授業改革の扉をひらく—問いはどこから生まれるのか—

session0 11:00-12:00 ESDとは何か？ そこから何が生まれるのか？

session I 12:40-13:50 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う knowledge fair

session II 14:00-15:10 課題の提起 方向性を探る symposiums

session III 15:20-17:20 テーマ別の話し合い 問いを深める forums

## 3/2(sun) 8:20-14:00

### 実践研究 福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る round table cross sessions

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面に共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

Session IV 展開を語る/プロセスを聞き取る 8:20-14:00

- ①はじめに 8:30-8:40
- ②自己紹介 8:40-9:00
- ③報告 I 9:00-10:40
- ④報告 II 10:40-11:40
- ⑤報告 III 12:20-14:00

#### 参加申し込みについて

- 申し込みの詳しい方法については福井大学教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご覧ください。（受付はホームページから申込書式をダウンロードし、必要事項をご記入の上、メールで送っていただく形で行います。受付期間は1月15日から2月17日を予定しています。）
- 3/2のラウンドテーブルの実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。

2日のラウンドテーブルの参加についてのお願い＝午前午後全日程（8:20-14:00）の参加をお願いします。

- ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため8:20-14:00の全日程を6人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として8:20-14:00の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしく願いいたします。

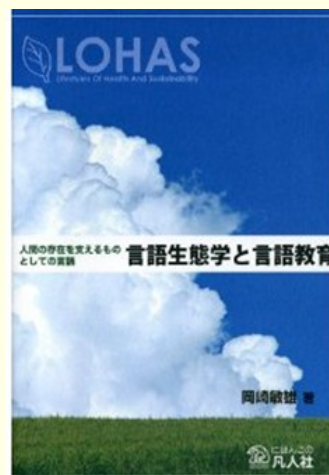


# 書評

## 言語生態学と言語教育

人間の存在を支えるものとしての言語

著：岡崎敏雄・凡人社



今、世界はグローバル化の中にあると言われています。グローバル化とは世界を一つの巨大市場と化す動きであり、その中で、人はかつてない生存の危機つまり「持続不可能」な状況に直面していると言えます。そのことは、人類史上かつてない10億という数の飢餓人口および、近年の資本と経済の自由化によって加速された、雇用・食糧・社会保障基盤の崩壊、環境破壊、エネルギー問題といった数々の深刻な問題の生起に凝縮して示されているように思います。

本書は、日本語教育の分野で「内容重視の言語教育」を展開してきた岡崎敏雄氏の思想的水脈と言える一冊です。岡崎氏は、グローバル化の現下にある人類の持続不可能な状況は、自然の一部である人間の根幹を支える言語の「形骸化」や「融解」が背景にあると警鐘を鳴らしています。人は言語によって思考し、言語によって他者と関係をつくり、それによって生を形作っています。本書で岡崎氏は、自然・人間・言語を不可分のものと捉えその保全を三者のつながり方から問い進める「言語生態学」を理論的基盤としながら、人間の持続可能な生き方を支える言語教育として、「生態学的リテラシー」の育成を基軸とした教育を提唱しています。

リテラシーは、伝統的には読み書き能力を指す識字能力、また最近ではコンピューターリテラシーなど個別の領域における基本的な能力を指す時にも用いられています。しかし、本書ではリテラシーを「生き方のベースとしての基本的な能力」と位置付け、その上で「生態学的リテラシー」を、①「世界はどうなっているか」の問いを考えることに関わる世界認識、②「そのような世界の下でどのように生きるか」に関する行動基準／生き方、③「その下で人とどのようなつながりを作っていくか」の問いに関わる人間関係、④「これらの問いの下にある自分、とは何か」に関わるアイデンティティーの四つが相互につながりながら螺旋的に形成されていくリテラシーであると定義づけています。

本書の構成は、「はじめに」で、雇用・食糧、そして言語が人の存在を支えるものとして存在していないことを見据え、「なぜなのか」「何をすべきか」「人は何であり、何であるべきなのか」の問いが發せられています。第1章では言語生態学という学の骨子が紹介され、第2章では人間の想像力の回復のために何が必要かが言語生態学の観点から考察されています。第3章ではグローバル化する世界の中で生きるのに必要とされる多様な能力とものの見方の獲得をアクロス・カリキュラムのもと社会的に保障していく必要性が述べられ、第4章と第5章では生態学的リテラシー育成のための学習デザインが紹介されています。

本書全体を貫くのは、この世に生を受けたことを肯定し感謝する筆者の想いであるように思います。それは例えば「数え切れない偶然の手渡し連続の末に、生を得て今ここにいる自分」といった筆者の認識に現れています。各章の冒頭に配された、アメリカの先住民、インドの農民、陶淵明らの詩や岡崎氏による解釈も味わい深いです。

(福井大学教職大学院 半原芳子)

## Schedule

12/24 tue-12/26 thu 冬の集中講座 1/25 sat 静岡ラウンドテーブル

2/8 sat 教職大学院入試／宇都宮ラウンドテーブル 3/1 sat-3/2 san 福井ラウンドテーブル

### [編集後記]

福井では初雪を観測し、いよいよ冬が訪れようとしています。今号では、森副専攻長の巻頭言を筆頭とし、11月に各学校で開催された公開研究会の報告、東京ラウンドの報告等、学外での学びの語りを中心として構成されております。加えて、1月は静岡、2月は宇都宮、3月は福井といったようにラウンドテーブルの開催が続きます。併せて案内をご覧いただければ幸いです。これから福井大学教職大学院は冬の集中講義が始まります。これまでの学びをしっかりと紡いで語れるように、院生・スタッフ共に、より一層精進してまいります。(藤井佑介)

## 教職大学院Newsletter No.58

2013.12.24発行

2013.12.24印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dpdtkui@yahoo.co.jp